部門
番號
一部ノ冊數 13
所在

萩原先生著

二帙五冊

校正
譯注

源氏物語評釋

鹿鳴草舍塾藏

若紫 評釋

尊經閣

若紫とつづきたる詞を見て式部が作の歌為尋人名也 ふつくそいつくしうもかんむりまたの様ようまひくる姿のうつくしき尋ね申さるよよきてり云く

新 紫をもてあそぶとハ色根を用る物の孫ハ理ぜんなり 伊勢物語に春日野の若紫といひてうつくしきを紫草ひとと云へて若紫といひてうつくしきを紫草ひとと云へて若紫とのいとけなきをいふ

玉 源氏君十八歳なり

釈 若紫といふ名のゆゑあるとうたいて財報のごとくあるべし 紫草ども植られハ蘇生女性のゆゑに紫上のゆゑ紫草をいふ歌をもひとしてなるべし 次のくまとみあれ未摘花と反對よくしるべし

評 此夫人の数増と申ていろ〳〵案ずるに新考の脚ハ未摘ふまてふうゆく強きるを紫ハなるべしふかくわ〳〵ハやまの本より芳野きるハ例の案ずるにまぎれなくハ未摘ふまて花と若紫とうつくしきをもてあそぶとうつくしきをもてあそぶとうつくしきをもてあそぶと

世尊の照應ありて國土の同じ時なること後世もかくのごとくせるなり又世尊に外の世界ありて
祥瑞のあらはれてはあらずとかいりまひく六條とりあげまきまりまゆれど
ちくしとあるも世尊の照應なく既ふまことを二条院へむかひまひをちせるとかてはれ未
ふ二條院ふ行ちくしまバむしまれの君いまもうつくしたるさはひちくしまあくしなり
かしきとあるうとこと君やうちくことあるハ世尊のもとを捨てるるそ世尊と紅とを二うふ
ちけく反對ふしうをひとつふ捨びうの所あり君人世尊ふちくをうでむべしいひ
あるべ巧ある出さまはてらいあるべのくれ世尊ひよりぬことでもおり
○北山のうまみの阪なるわづ〳〵傍教の僧坊をたいそでかりとふ女子てるられちくをうげ
あるをしあるこどもとられくわしそびあハ君やるといふとうはきしてはくうしうの山へ源氏君
のやうて京のうちを見まわうまく涙慶明のもをかしをさ伏柴をあハさまうる
手つきいれちくびめでしたのもよ絵ふいとようかるれ又出ないとくまはしせ
ちそんあと絵めのよういひ起されるを孟津ふ涙慶まうて西をうれるひしてみおうり
なりとあるとくかの日記をあげきまへべき伏線なるべしこの脉つひよ後金ふ
ほうとびかるいひちびをしと搖奪ちの子れ今年義くようかあり始るとけそ
後ふ良清と君とうるくのあるをうふハ世名をあしてるれ後ふ出さまも
うるとその良清ること成いれさしはくは後ふ明石上の嫌とうるべき猫をはされるあと
すくいまうもいるしなることあり　さて紫上をういまんあふ所よ先雀子をうる出て
ちくそのいのあくおほどふらくうれさまは成あしそ雀子より君の後妻のす
ようつり後世のすより紫上をうしうめうくちひうひくあ紫ちのくよ紫りはひよ
按寧大納云の出ちうふまうりゆく次第いとめでしかてけんまみのさはをくちく

あるちくをてこさるハうびうあうんをつくゆるくいとよう似まるうまわう
ちあり々ちとうちうる抑揚の勢ひいうくつくいみどくはうさて君子の方
などよみくて君子の打ちをれまうる所へ傍教のきておどうしうるとぢあるはようし
平沢よかまバうのすきめのどもハうくとて打ちの面紫君子の脉をうけてあれる
あどもを遠間ふ君すぎ海ありあげゆうふハいとうとうかすうとふうハうで出俊俊を
ひやあって源氏君のオと思ふのいうびうをうるのうれ文ありさてかりあひくあ幸へ聖
の平奏しあつうそこのひどまがるを結びうる和さ蓼上のかハ桐壺よりうふさの傍の極し
○藤壺宮の出家ハ光でうはよめでしかこの既ふもかうぐはせるごとく世すの上の見
出ちうちとちうあくうふを出ちういうてまさくあひのうことを
あしハされうたとちうう後ハ藤壺宮の悔こ出ちまのうをのくかまてうるあどいうよ
ろしさそうれを世尊ふしも紫ちうる八世尊上のうれくあちわふ出をうひて間隔
しうる法ある八勿論あるでかのはうくみのゆうりを尊ひ出のうくうあのまぎれの汚ま
をちくみのようを出づけてゆうりのうをを世尊ひよりづくべき法様とちうれうさてその
事ふ源氏君のやどりてしさ尊を見給ひ
うくうとハ桐壺宮ふ言葉の相くぐいうりしう事のやく妻くあうりてまうる和くんをうくし
下の出くれ源氏君の盛衰の伏柴をそやくうをうくし
○尼君の死をうひくうふ出ちんしあうハ世尊上をそやく後ふ後ふこの
尼君出ちへうくうふ八世尊上のうあしうくのあうきあるさ海をあくうち
源氏君のむへとうるべき事の理を出ちうくうる尼君をさしも用る尼人なるべ
きくうせうるよふふすうとめられうるあるべしうきてうう世尊上をむへとうるまでの

○えむ〜さた

半ハさぐりていとさあれ人を扨〜ものあるまじ
きとうれる俗のいとをぞ〜し兵部の祝主の乳母がめ〜〜んとのこゝそさて世上を
さぐりもとめあるぬ人今せのさ海の〜そいとこいわ〜〜きなどの事るれども世のさまハくても
ハして悪なりもしと世海の中よいる制度のものまさ比丘悪ク新浮舟ゑどまめ〜の人比
うんをあひて〜〜て物〜べう〜〜ぞ兵部々祝主比北方のこゝも悪〜の事ふを絵とかぎ比
あ〜ふれうをんをつけてゑんぐきなり

わ〜ハやこゝ 細 俗ふりよおこゝろ
録 和名抄云瘧病説文云瘧音虐俗云衣夜美一云和良波夜美
寒熱並作二日一發之病也
よろ〜ぐまじ〜ふひ〜ぐ〜ろ〜ど
孟 まじ〜ふひ〜厭術〜加持ハ真言
教陀羅尼のこゝ 釈 よろ〜ぐ〜ぐ
い〜ゑハさまく〜の呪術をつ〜て
せさをうひ〜をのゝ
ある〜ゆ〜ゆよゐん 拾 ゆ〜ゆといふ
ハもあれどこゝハ北の方ゐる也
釈 四注ふゆ〜のゐゐじをを鞍馬
寺とて准擬をく挙られ〜ま
ど例の用ゐるれバ引出ぞ〜ぞの
あ〜りのゐ〜ものゐ〜ものて〜ひ〜
かこ比おこゐひく 釈 さまく
の修験道を行ひて行徳ある僧を云
人〜まじ〜ゐひ〜ぐ〜ひ〜を
釈 去年の夏も瘧病流行〜〜る
時ゐ〜〜れ人のまじ〜ゐひ〜めを
出行人ハ迷よまじかひとじ色数
あまさ〜ゐとう〜る
ま〜ぐ〜〜ゐる時ハ 細 瘧ハ
そびゐ〜て色〜ぐちゐゐ〜

○えむ〜ゐ比

源氏君
わ〜ハやこゝふ〜ぐ〜ひ治ひてよゐ〜ぐよま
瘧 病 煩 特
じ〜ゐひ〜ぐ〜ぐまゐ〜せゐ〜ぐ〜ぐ〜ゐく
呪 効験
てゐまゐ〜ぐ〜びゐ〜ゐ〜ぐ〜ぐ〜

釈 ちぐさるハ縮凝のさとなるべし
まぐるひ損ぜれバ病の縮み凝く
なるなるさとあり
とくとくとくとせめへ 釈 えやく
彼ひとをめして試こころみへとせよ
老々まりて 釈 老屈して室外よ
もえ出ぬとゐるのことをいふ
いぶバせんゑ 釈 さゝバいふぜん
ゑ志のびてゆくとのまへ
出とゐるゑ 釈 出を待のむつ世
きへぞう国へ人れて行のまへ
やくふゑゝへる所あるゑ
釈 行人の居る所ハやゝ山陰へ入る所
あるとまゐを居所のゐるをとに
次ぬ入りて坐ハ出る次れ々ゐをとひ
ゐゑ手れさるもとゑ一文を次ぬ
やゑひのつゞりあるまバ
釈 三月ゐるもとのやゝ必しも晦
日のゝふハあゝバゝゞまの十日れか
どを大やうよいゐ所出て出ゐ
みゐさるくゐきいをゐのゆまで
王 ちぐていをゐのゆふすもいへる
ハ山の表れ出ゐれ立めぐれる地へ
岩窟とゐるハひゞとへ

とゐるまひてぢもふむつまゞれ思ひ人で
眠 近
うゐしてぢまゞぢうれよねをひやゝぬゑう
入 北山 深
ゐ所なりゐをぢやよひの生ごゐり形れだ。
三月 ス エ
京の花ざゝうハみれすぎふゑう。山の樹ゐ
まゞ出ゐゐまへて。入めて形ゐるゑゝに。嵐
の生ゝぢまひもをゐうんゆまバ。かゝれ
タ ナヤ ウ モ オモシロウ 源ゲ
あゐゐ海もゐゝひゐまぢ。所を見出ゐて。
ナ レ キウクツナ
珍 あゐ生ゐゐゐ殊 勝 ぢ。ぢゐ聖 ぢ入居 ゐ。
ぢ。ひゞ聖 ぢ入居 ゐ。
生れもちゝ 今 知 をゐびゝとゐゐやゐまゐ形へ
テガルクシ

孟 いゐゐんいゐゐの中ふすもバゐゐ
ゐのゐ紀ゐのぢゐさゐん 古今雑下
ひゞゐ 釈 行徳ある僧をゐゐゐの
ゐの俗徳ゐゐや徳釈ゐゐり
ぢんゐゐの形ゐゐひも

釈 験の方れ行法もゐゐさゐ験ハ
修法加持ゐゐの効験ゐりとゐゐ略
きていゐる俗徳ゐ旧注ゐ現世の祈請を
ゐまゐゐるハゐゐら現世のゐまゐひゐ
釈バとゐる老屈して後世をのゐ釈へ
まバゐるゐれ修験をして人のゐゐる
ゐゐぐハ持をまゐうとゐゐさゐり
さゐ所ゐの僧ハ大ゐ修験をひゐを
して何者ゐゐゐゐゐる代いゐぢゐき
面目ゐゐゐゐゐとなりゐぶ者を
ゐゐゐもゐゐゐしえゐゐまゐゐゐゐき
ゐ紀ゐくゐとゐゐゐぐをゐりゐき
いでゐゐう形をゐちつん

釈 修験のゐハゐひゐけをいゐゐ
しゐてゐをゐつんゐを形ゐき棒ぐを

評 ゐぐゐ紀ゐさゐぐをてゐゐゐゐぐ
しゐを抑ゐくいゐゐゐゐ紀大ゐゐ
ゐゐゐゐと揚ゐる文勢いゐゐを
さゐべゐ形ゐゐて 細 符なぐゐゐ

まぢ。ゐる紀ゐ
著 添ト
ゐ作りしゐ
召 御方
生をゐひ形へゐバぐんゐゐの形ゐなゐ
験 方 行 法
ゐてゐれてゐ
忘
ゐんゐおぢゐきをわざゐゐうちゐみゐく
タデアラウ 咲
ゐんゐる。いゐゐゐゐゐゐゐだいゐゐなゐゐゐゐゐる
大 徳 然
ぢ紀形ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ほぢ。日生ゐゐゐゐ形ゐゐゐゐゐゐゐ
ハマセ 加持 係
ウチキ
いでゐゐみゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐ形ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
僧 坊 顕露 下 係
生ぢゐみゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
係 折 下
九

だ〜酒を大きるべきあんと作り
釈 ふん待をそひてよくるあり
今俗いふことはこのつりをせ俗な
今歌ならべ〜
をそう之出つ 釈 かのひ〜の所
をおーえそく見ることうと
をくるべう 餘 要覧云讃休云坊區
也苑師云坊區院也 釈 今世寺中
といふのをはあり
さぐこの作ぐらをうの下ふ
釈 さぐこのといふう伊氏者の何と
ん〜べ〜詞の手ふ所のを作をつ
ひ〜をそ〜ひく法あり 玉 つぐらをう
ハをもまぐりをはのをれ黒葛の
をあふ似るよういるあるべ〜
同じふはあるさど 釈 ら〜ば〜小柴
垣と垣の字はちるれ又かくひも
なせふハ垣とまれしあもあべ〜
ちるとしくるすふり垣とをを
〜せるゆく屋廊ををふ栄て
ちるぶうふはゆる氣ふかく浮まるく
本ぐらいとうあるハ
釈 本をきりすしあ〜てんあて
めるをきまた作りるを云あるべ〜

なるまでどう(リツパニ)ちうちうちう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いとい（ヒドイ）ったり。たゞの後ゆく。出世もせて
べうわきる人の。世れひづもれゆてはしらひも（ヘンブツ）（ツキアヒ）
ゼラぞ。ぞ（コヒ）雨の中ねをすて。ゆ行われりそる
はたるきうきでかのうれ人ものもさうあ
播磨守（播磨國ノ）
あづ（面）ゆ。なるれめいぼ（目）くまてうぞ（タビ）ゆこ
軽慢
ゆとうんといひ。かうらゆ（頭）ゆ（下）ゆ作りゆる
をすう（チト）ゆ。わるまわ。る山ぞみめをぞ。ざる
海づ（タ）にいぞ。みるる。（公）えづ（ヘンナキナル）ゆ。るれど。
げふ（バ）のうれちょ。さも（サウモ）人のこゆゆゆぬ
（イカサマ）（金竜）（居）
ぞきゆ。ぞ。ゆ。ゆ。ゆ

滅罪五の所よ　細　只海よりのもとの
いのようてのえ合をしてい
釈　此ゆえんのごとくハ所ゞ名人撰つ
きぐせ　さぐでハよりのひきをぞ
よつさて御ハ大さなを迷ふのと
くゐかるまゝれハ海よりく諸五の
所ニあるべきいろ女ハんハ所ゞ
ハさのまゞ　やとて　く笑
ゐさ　ありさて　浦　五とゐ名ハ仏
名よりのふとゐるまでハ旦注　婆羅羅の発
語の釈ハこと　こゝ　ゐ
かくいふハ　釈　かくふとハあり　れ
釈　ゐさのむすあれすを　ゆゝ
人をまゝていつう
義人ゆりこと　ゝ　ゝ　ゐ　ゝ
拾　正月五日の叙位ゝ六位の義人ハ
ゐ　ゐ　ず　巡爵とて　役五位下ゐ叙せ
ゐ　ゝ　ゝ　ゐ　ゝ　ゐ　ゝ　ハ爵のゝ
かのゐされゐゐんやゐりつべき
釈　この物語ゐるゐ位の義人ぬゐ　ゐ
ゐもバかのゐ位ゐゐゐさ　ゐ　ゐ
ゐりてゐゐ物とせんのんハあ　ん　と
御　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
よゐるといゐんゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　

こてめてなるまきぞおきけれきくにのあり（イテ）
ゆうでぞさてかやをくてとどころをえおきこら（サウシテ）（得）（置）
じをやちどいつもあり。君をてらんあるく。（人道）
うみのうこそでふうこいひいるんこいこ（海）（底）
のみこんもめのむつうこうおどのをひて。（コヲアラタメ）
生ぐ（ヒト、ホリナラズ）（カシ）ぬもほうこるまかやうまても。（決代ら）
なぐいなぐ（ツウ）（ナラズ）ぬて（ヒトクセカハッタ）ぬぐこうこうとこのこ
ぬふはんおまぐ（明君ノ女ニモ）耳ぬぐまるぬ（イル）
やとんまぬ。（決代ら）くまこかうぬまぐ。（決代ら）おこうぜ
おこぐなわあるよてはあまぐやう（帰）
らせおひるんとある紙。大とこぬおのこる

なぐ（加）こうまてるさ海よおこ〜まる〜る紙。（今）
ようひとおぬ（夜）ぬぐ（持）こうぐおどまおりて（静）出（山ヲ）
させぬくとやぐ（御供ヘ）ぐこうこ乳人やて

あさけあれくのくなるゆばうしこうむるくもあくさやうふこうゆくくそくはうあくまぐしこいあさこやこいふく
ふ他人のあさけあれがやこふゆくさこえやこぐ牧若つぐ〜
えはいうありてこく　釈 八月にのうありてさやこうふ他こ流めよくもぐはきこもこるあ〜んこいふこあるこを縁後
こてあやあこるえふくハ海の縁こうめハ海松あるをとる見とうひあるを俗く　玉 底のこる見きこるをこ新
なるぐれこいうて海のここまぐこハこひくく海こ者をあげよくいの〜んこいふここ引こ平有
こあこうこて　釈 こあこうこハのこまくぐものここあり　新 葵上に傳市島新あぐこのやんここあ
りてひぐここうこあり　釈 あぐくあぐびあひぐここうこハ一ここあ変あるこうをぬここのふこいふここ
あこをいあ〜ん　釈 ここうこ市供の祝くおお掃こど。ハこの信こここここる従あまぐこかここの系ハ上あこと
くまここうこうぬまぐど　細 こあこのこ信ここここここ信あこここここ

くろくあるを見てびっくりとなりひるまねばさす
がふをうつくしくさしあてたるとの給ふ。
日といとものがたりよつまどるれだやゆゑれの
いろうかをそこらてにはきれてかのうちぐだた
のもやふあるもちいでまゐんくしきひて
御供 僧侶
御 柴垣
御 僧侶
御 僧侶
御 僧侶

ゆるくとうてかはをいとあらくさしわなして
赤　摺
出てゆ。居君ノ羽　顔
おるごとでやゆらゆらもべとそてぐちち
立　今サルヒ
めくるうとて。居君の口あぐるふ。ちこしもぐくる
上　似
所あまぐでこなめわとみのふ。児ノ羽　ちぐめのこ
子　雀　子
いぬきぐふぐ。ちる。ぬせごのうちふこれる
逃　薫　竈　中　竈
まつるめのをとていとこちをとわるへう。
ザンネン
られみるこ。居ノ羽　おるれ。きこのむあれ。ゐるわぎ
カノ居
をてて。ぢ。罪　いぢメラレル　ていとんづ犯あれ。
キニクハヌ
いづくへうまうわぬる。いとをとしうやう
何　方　カハユラシウ　ソロ
やうなわつるものをかうはなどもとて
ソロト　烏
ん。ちとて出もてゆ。ぐゆるふ
髪

らぐこてあの反ぐ。　玉　ぐくハむ
のぐ。こ年のぐくいゆ尼ハさぐう
ぢくこうること。ぐこ
明　涅槃経第四金剛身品特戒比
丘比丘尼不得畜養奴婢牛羊
非法之物
うちうあう　河　ふゆひやうあるう
めんさ〜　玉　髪のちぢ毛とゆ
こ。ゆて木の枝れさ〜ゐるさ年を枝
ざ〜とゆひ目の物をさ〜てゐるさ毛
をきゆぐ〜ぐ〜ゆぐ〜ぐいぐ〜されて
ぐ〜れハ頬の際（きぐ）う頂の方（髪の
生ぐ）のぐりさせるさ毛をゆ毛こ髪
のぐれとゆも枝のきれと同じんぐ毛こ
ぐ同ぐ毛ぐ〜ふ毛ゆ毛ぐ毛ぐ〜
さるハうぐうあうぐをつてゆもゆ人は
細　茎　茎ぐうゆぐうぐ毛をもゆひ
詳　ぐ〜ぐいうてぐ〜ぐめて茎茎ふ
似をゆうぐ〜ぐ毛あゆぐれぐう
茎　茎ぐ毛ぐゆうて似ゆうれぐう伏
茎茎のぐれをゆう〜ゆ〜ぐ〜
伏ぐ。ゆ。　詳　ぐ式一枝ぐ〜ゆ毛
〜ゆて茎ゆのうをつぐ〜ゆう〜ゆ
う〜ゆあぐれ　択　ぐ毛上のゆぐう

いぐ〜めゆ毛ぐ毛人あ毛う。ゆ紐ぐ〜れめの
ミグルシカラヌ　乳
母　居君ノ羽　イヤモア、幼　後　見
ぐ。ゆのうぐ。ゆ毛ぐ〜ゆ毛ゆ。ゆ毛ぐ〜ゆ毛ゆ。ゆ毛ぐ〜ゆ毛ゆ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

おくまろくさの[illegible]
えさうあるまあるさうとい
ろうもたしにおてまろくい
釈 四もをろうふ今ほーも場つさ
よはをーくるとあさてうるし
とうあさくえもとひうをとう祖の
あどうひすべてうれとと
うくよけううぐう 湖 表ぼひよ立
あぐーほをもてもやざうてよくを
はせよのーをうあえる源氏
玉補 ぼ祖いぐのーられるもうの
ーまゆるとうえーを活まういく
ーるくかーぼてく評判をを言
をいうまくうれ
釈 源氏をのうちぼあるる例の
脈くををすてうる俗あぐもぼを
ーまハ悲伝ちまし命を延るまう
ーをゆるとうを
かるまばるのすれりのどもハ
釈 このハ例のかのとの書こすれ
りのハ あおうよあぐをちーくをさし
ていくるさてうめきハ源氏をの
ようまうをうをあるかあまれ
ようとーくくをうをうふかのすれ

まぐるひよあのーまひうる氏。きぐいまなん
きーけけ待る。いみーぐうきのび活ひうきばえ
ちり待ーで。あぐふ待ちなぐうぐはとうひまも
まうでざわうる。とのうまくだあれいうぐや。
作やーれぐ海をくやうーんぐとてすれおう
ーつ。こみよにのーまるふひうる源氏ぐ源
作いでよんをう活ぐんやぐをとすてうる法
師のうちあもいみーぐうよのうまくーえまま。
よるひのぶるくのはるきまるふりいでは世う
持息ーぐんぐとてうつやとすれば。ぐあるひぬ。
あるるくをんつうれ。ぐればうのすれ

まのどまハがくあり歩行をのこーてよくさる
まぐれくをんをとんつるれりうるぐあまうに
うちいづるぐ立出ぶかくぐひのあれうるぐをを
みるよ。丙をうーうおどーざいとうつし
うりつるちごぐ児れあよどなーんかのくハ
ぐるよ。あけーる朝のなぐきんまもんぐやと
思ふーうふうーはきあぐうちふ活ぐふ。
源郎のはすぐこ惟光こうれよびいぐされ間
ぐれ所あまぐ。ぐたもやぐて少ぐふよぐうり
おぐーまーうるはぐでいまあんくまうはよ。
おぐうれなぐうさあーふぐれをぐなうふ僧
人

老ぐもハ身捨ーてあけれうう
あるあうさをのくすればふくを
ぐるくをもれつるとうのくれ
地位のさもを変ぐのあうあり
評 こは帚木の照応をこのあふ
うーさて行ぐ極んをつくべし
さてもいと 玉 はきてもハ俗ーの
さてものぐに雅ぐもハめぐーれ
つるひざまく 釈 あハ雅ぐのつれ
ぐまるて還ぐのーれさて
いいくれけうくまくあうつまぬ
釈 かのくハ茶ぐ茶づがいをぎ
ーてもうをせうハ例の脈くをて
ぐをるて世上を茶ぐ茶のはうを
とあーりかうれ藤ぐくめぐーし
ふうーとうれうをつくべ氏
源氏をう賛くさる弁一のはうある
茶ぐり
よるうるーもーくるよ
玉 すべてよるとうくをうよれてある
さてまくうこもをさまて伝
教の坊ハうちーべをするくをいう
あるべーうくまて又まるとふ言
ハ地位まるぐくハをるーまるる茶

○若ぐーされ

をこそハあらしの後ゑ所ふいろ
うれそーく　顕こハふぐうれて
やうてうよあーぞせんうさあく
うくそあをいと　湖かくまさのりせ
まあをうれへそひてせんをまひを
生を為をーくく

草のはむろ　玉多賀といふごとく
諸説のはむろ多賀ぞそのとハいへる
十よ日　登よの字あり音あり
べーゝの十よ年まやあり作りり
ぬんとある作そあべー
かーやうあるへのそく

細効験あーバ子細あるまゝ記を
ゝ二験あくバ所の威徳もいうゞと
あふ方よ上のびあるとゝ学もほの
用さ海さゝゞひある紀
しゞあるよりハ

釈験ありといふ名のあ尼人よりハ
今ゝあるゝ　釈あんとあを
ゆくめぬーゝる
すあるゝ作紀あるあ
釈法氏ゝの隔をあ紀をゆて即刹
作紀法氏ゝあるゝ人あ年まるゝ
ゝ上当然の礼あり

このちふあり作ると八ちゝ也あゞゝ。
ゝあびさせゝ紀うれちく心ひゝへてゝん。
草れはむゝもこの坊ふてまうけ作べけ
まいとちいるたとゝ中紀へういぬる十よ日
のゞよりゆゝそやゝゝゞひ作をゞび
かをるあて生へゞゝう作生ばゝ人のをゝん
乃まゝにゆゝゝる生ゞ紀入作ゝつまゞかう
やうあるゝのゝゝ験ゝけゝさぬ時ゝゝゝな
うれゞをゝも生ゞあるよりハいとほゝう
ゝひゝ人作みてゝんいゝう志あび結あ作ゝ。
今ゝあるゝよもゝとのゝまゝうゝふゝも作紀

うゞくーゝれあゝさ紀
釈作紀ゝをゞりーく用ゝあゝく
ゝつあをもゝそゝゝゝれゝゝ人あれ
ゞあゝりふかゞゞくーゝゝあゝる
を法氏のゝちゝすゝゝ
ゝあ月ゝるゞゞの　釈林ゝのゝれ
ゝゞもをゝゝうあゝ
紀あ下ほのいゝりあゞゞ
釈ゝれかゝゝも同ゞ草法あゞと
どゝく　細法ゝさゝ八紀あふゞ
ゝゞれゞの作くすゞじゞあゝを云ゝ
作紀ゞかゝく法氏をゞ八ゝゝと
てのゝまゝる頃
まゝゝゝぬゝゝ　玉法氏ゝをまゞ
ゝぬゝゝゝ　盃おの果性紀ゝゝま
の紀このせゝのゝゝあゝ法氏ゝる
つゞゞゝゝゝあんゝあゞくいりをけ
てゝちゝゝひゝへゝゝ
あゝまゝありつゝゝゝゝも　釈ゝ上ゝ
同ゝ本ゝをゝもゝあゝ
釈ゝ山ゝゝゝゝゝ同ゞ本ゝゝゝも
ゞゝうゝふ楼あゝて尼あゝゝゝ
作ゝゝゝゝゝゝゝゝとゝゝゝふ
んをつくゞ

まゝあゝりゝゝまゝゝゝゝ法ゝあゝまゞゞいとゝゝむゝゞ
うゝくゞゝゝゝゝもゝゝんゝゝゝゝゝゝゝゝ

なつ[illegible]月もすでにやうやうあまたでやうやう
ぐう火とり。燈籠などもはやうつ
南おりていきてげにまつ[illegible]ひさもへり。
ぐぶ拙僧よりてうちいでこやうぐ香れ
うなどゆひみちるるぞんの法おひ風いと
香
さるるに別うちのくもんづひまべ
仏教世のたまひあれ法拙僧ぼのせれ事
あどゆすし常もつせまふ。法つれわどおろ
ろ[illegible]。ぢちまれとふんをちめていけ
アニバイナル今涙生
るぐりぷ涯これをちひなやむべきなぞんまり
コヲ悩
てのちれよのいみ[illegible]べきをぬげ
況罪

○孟津のごとくあるべしあぢれかも
きくふをあてしある詞さ世
のつれとはすゐ移ぐ
まして　玉　いけるぐうちふ対
つくまりて後なかあり
かやくすかひも　釈　ゆう
ある心ずくりてせそのれまく
しくあぐしのおりこ居のぼそよ
のおりげんちくく
らぐはまりちそそく
　潮師　いひ知んもさのうあさふま
こちのあそぐうちたと仏教拙
法ちのくる新く　釈　こよ拙ゆ
人をふぎまりきさそもちしと
をちふこまりてどんをちのさ
うちこひくく
釈　法民君のそこそぐちと仏教拙
のさこりしをちせ対ひ[illegible]
つけるちくくちちく
左拙宗大納言　孟　尼公の夫出
上の祖父あり　釈　大納言まて
陸奥出羽の按察使をもてちくく
按察使をつめてアぜナとらて
ちのり[illegible]ちく

○[illegible]

つぐ山居ノ一人ゆうやうみるまでもひもせまりこう
わぐちるまふ拙ちっ。ひこのおりげんちうて
ちひこちまぐ昼見ノ係詞さこよ拙ゆふハ出まきてちった
ぢゆゆこ[illegible]ぎ[illegible]ぢ[illegible]ぢ[illegible]ぢ

釈 侍従殿ことうあて事も出
給ぶれをうけたまはりて尼
君の御方に伝たまふ
御消息ハ 釈 はしたかいうまと
いの間をたべてかの給へ
ものあてるのまへ人ハ 釈 此信濃
ちろ一伊氏君ハ世ゑ尼君の子
とかゝげ〻ゝれど実ハ君ハ
ぐゝまゝびあてふいひ法ゝのゝ
むすめゝぐひとう
湖 侍従ハ世ゑのすゝきちろ
で尼君のむすめ世ゑの母ゝのを
ゝゝゝのゝ
ゝぐ侍りゝハ 湖 右馬の允
玄ゝのゝゝ
いるゝゝ人のゝゝぐゝ 釈 いゝ
ゝ人のゝゝぐゝて蝶ゝて兵部卿
宮ゝのびゝゝゝゝひゝゝゝ此
不思議ゝゝゝぐゝゝゝの世ゑ信
ゝゝびいゝゝむゝゝ
ゝゝのゝゝ 釈 兵部卿宮のゝ
ゝ世ゑゝゝ人のゝゝゝゝて
ゝゝゝゝゝゝゝゝ嫉妬ゝゝゝゝ
世ゑのゝゝ

背向 尼ニテリタルヲ
ゝ
ゝ
ゝ

中〳〵のと体言ヨリ人ニバ十二、十カ
十ニビヒ等ト濁シテ云フ
ラメ　釈　ハ若ホ
めなのかたまでこの子とのさま
まさかうつるゆくへの
国　ゆくへ伝ハラの拾ろうれまく
釈　をさかりなのまとあさく
うつくしらの初るまるきバひま
のうまくふれうし時のまをとひ
物のくをうゆ思ふ物也こゞろ
なくあり伝しわゞくまて
釈　ぼの母上れあるのひとをう
しふ女子ア人うゝ結ひ〳〵
伝りしとあハ髪のひ〳〵
そまてつけて。　釈　その女子の
ゆるつけてもゝ拾ひ尼君のと
ようひのまよ　湖　尼君の花のよ
ゝひのまをひなげうゝ
されバと　風　ゆふをのまゆ
ゝとおげ〳〵合をうとゝゝふ
ていゝ〳〵浜をうのあ
あ中尼〳〵ゆれど　風　伝ハラ
中あくさうあまでもなゞくあ
ちゝひうゝ何ゆゝ

をゝへ拾ゝ〳〵ゝんぴゝやとおもわ（生）（立）（俗）いゝ
あゝまゝて拾ゝ〳〵ゝれ。そまゝバとゞめまふ
ゝゝみもあ尼ゝとをきみゝうつるゆくへ（無世）（イヤウヘ）（人）
の。ゆゝあゝにもゝまゝ〳〵ゝ。ゝひゝへば。（幼）
たゝ（伝ハラ）ゝ伝りしゝゞゝまて〳〵ゝ。そまゝも女（ジブン）（イルナリ）（人ウミ）
ゝゝゝゞゝまゝつけても拾ゝひのゝより（催）
あゝんゝ〳〵ゝひのまゝひゝへゝゞゝ伝ゝ。（侍ハ）
とゝゝゝゝふ。ゝゝまゝバとゝゝゞゝる。あゝゝゝ（尼君）（敬）（河）（イカバナ）
ゝゝゝれゞゝをゝきゝうゝゝふゝゝ（幼）（人ウ）
すゝゝゝゝゝゝ（尼君）ゝ伝ひてゝゝゝ。ゝゝふゝあゝて。
ゝゝゝゝゝゝ

末を引きて引きて孔雀といふ
なんぞと一法にさぶらふ
えうこも学べ学ばん 釈 あれいやなる
くやとあるさまもえうこ一ひ法
ばあとあり一ばかの上ふうるさく
まるの法をうるまん
王補 ばかばかの法の時刻をいまは
あばばふ初夜のつあくとをは
さぶらきて次の詞と重復せり
ふちもあやまり法よ 釈 瘤後あれど
源のよどくも
王補 よどこころよ用あり これは必
しるのみを法るるべし
釈 存の法ばどくもえ法をよど
こは源のるよせられてこうこたう
法むるればばとうみは遊字を
出あるるこたるそひどるのく
初夜のあばどあるべし 俗 例時とあ
を引とあるべし 釈 俗法の法ふ
べし一法れをあのるこ法のを
めてこし
きどふあるべ 釈 ふあくもどあ
人はばるば法ばとあるべ

初夜 末 勤 侍 悩 凄 高 音 冷 堂 (アミダ堂)

ものしものみどうぶてるの法こ法よあん。
そやいまどつ一ん法一どてまぐてさぶ一ん
とてのぼう法ひぬ君てこもいとなや
まきたあてこ一うちてこだ山風を
やうて吹こよ法のよどみもまをて。
おこうつゆすこ一法つげるご法
音 高 チット 讀
の中とどくすどゆるどすんある人
ヒ所どくあ法あこ社すまてはのりめぐ
ムサトシタ 源
らふまれ法ばあるどあるべ 俗 例時とあ
を引とあるべ 釈 俗法の法ふ
べし一法れをあのるこ法のを
めてこし
きどふあるべ 釈 ふあくもどあ
人はばるば法ばとあるべ

ハス 祝夜 眠 僧都 尼君方 著

まて源氏君はそめどの法
をこてまどつれのひとこ
初夜のいひ一こも 釈 俗法初
夜まてといひ一こもまば
一て法のいこふこるまあく
どどのここうこに
風 今藤の部屋よまこるあり
河 法そのよこどのこうてふあ
ここあこるこてんみこそれ
あここうあこうめく
釈 女房こちふどあるべ
とふここここ一ろ扉風の中を
釈 尼君の部屋は西のこと上ふ
あり源氏君公朝ばてふおれば
西みりての所れはおこてこ扉風
あるべ
釈 若は人を
ようふ房をぱ一ここ法地後
のまはもあまこれこう今の人
れもここ一こ彰あるべ
きこ一もどあここう
釈 この中こ人こ一こ法源氏の
房まをとみふこ君つはこか一
近きてあまや房のおこはひど耳

○えもはまこ

珠数 脇息 引 鳴 カスカニ ニコ、ロニクシ 間 外 建 ツヅケ 鳴 (内ノ女房ノ)

されど。ばどのこうこにひきあ一こ法
おこ法のまは法ばうこうおこよめくおか
音 カスカニ
ひ。ひてこ法こ法ばこうこ法ばひくばどもあくこ
こまどどば法ふ法こ法こ扉風の中成。
ここ一ひきひ法ばこ扉をあ一こ法へば
ばこうこ法こうもここべこあまどばこ法ぬ
こ
よまばこ法こ法こてねどこういづる人あおうまこ一
上ヒンニコ、ロニクシ
(アハベキ) 少納言ナドナルベシ
退
ここ法こあまこ一ひどみ一こまばこ法をを
ばこうこひて佛の法こ法こ法こ法こ法こ法こ法
(修ヲフシギヤキ、ソコナヒ) 案内 冥 入
更
ち一こ法こ法こ法こ法こ法こ法こ法こ法こ法
こ法のいこ法こ法こ法こ法こ法こ法こ法こ法
若 貴 女房 イヒ 出サン

の中でこゝろひとつにたゞくゝ西方
に阿弥陀の近きまゝふやくふつとれるハ
ほとゝぎす又式部卿宮人を四位ふ鶯
ときゝあてゝいとれるもいとゝくゝ
お鶯ものあれてハけかれど物くゝ祇と
もあ一人の女房とゝ云べし

ゆくゝけのゆくゝるべハ 河 永不聞佛名 法華經 真 於冥

新 此ゝるゝゝて是ゝゝる尼君かせ
バかゝよつけてのゝるゝく 釈 式部卿さ
る女房を仏のゝるべよゝゝゝゝく
佛ハ冥途に入ても決ゝ迷ゝゝく
ゝ仏のゝゝるべゝるべゝゝゝれゝ
をゝゝゝゝ耳ゝハゝゝゝゝゝゝゝ

玉 此ゝゝゝ尼ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

釈 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぜ〜たけたるそひよ。ぬのるをとハいへんぬん
とのさまへ。ぬ。女房方ぬ。ぬ。ぬ。

きそ人（紫上）なん侍るまでいかやうにかいのちひなた
ほどもなく（免）ぱかりのこるさかりなるも侍るべ
きまでぞ。そなたにはいかなるけのりつかまつれざる（留）
とのたまふ。（侍何）しおびつかうまつりけるを（悉皆）
あの侍。（キウクワニ）所きこえわかれ。（悼）ちぐらでやひ侍へ
よるさはりこそ（別）あるんのだをは侍ぜよとやす
まへどいとまげあたとをはもちでのうふ
とおぼしてぞ。（似氣）（サウトモ）
おちぬまぢ。（侍何）（答）かうやうそめ侍ぬまぢ。
いかなるものりうあんどておしてはひつ。（ヒヨ）
ひつたなりふれば。（屏風ヲ）法華三昧おこな

ひ釈よふとおもて
とてとる屏風の帖をもちて引
あけてとりそ尾ある屏風を
わりてそのへ入て法用師法華懺
おをとそのあとにとりこもるハいくと

注釈三昧おこなふ法華の

同三昧（梵語也此云正受又名正定）法華懺法ハ智者大師（南岳）所行法門也　花止観ハ四種三昧あり一ハ常行常坐半行半坐非行非坐の四種ハ法華懺法ハ半行半坐の三昧ハ懺法ハ天台大師或説道場式つくり法ひく六時ハ六根の罪を懺悔する法門ハ

吹まよふ云〻　玉ゆるせんぎの
あををゆて煩悩のあれをまあるうち
もとのふさをあてて感涙をあり
きそ〻ふ云〻　新さ〻〻ふ云〻
つけまといふさ〻〻ておもハ出家のる
おぐをゆすてさつけ〻ぬとしまと
とぬまでとあれてもむ見ハさもおぼ
えあハみ〻をまとあるうや侍んとこ
さへとうと〻　釈さ〻〻の説

堂（懺）のまんだら（法）れて見。山おろし（下風）よつたく
ゆ〻くる。いとふかく。（余）涙のあたひびきあひもち。
吹まよふみ山おろしよ爰さへ〻くあ〻ぐ
あたのおろれ。
（侍和）ける神あしるる山のふすもれ
こ〻ぬ侍ぬるぎやハさるみあれ侍ふ（耳馴）
やとゆ〻ふ。ゆ〻ふハいとうみて。
ものあるども（イモ）そ〻ととなく侍へだりひひ（ドコラトモナク）（轉）
ふもあ〻ふ〻ハ本あのそなどもいろ〻よ
ちりあ〻ぬ。（錦）をまるとんあるた。（リカ）（敷）庫の（イク）
生とずみ侍ふ〻もめづ〻くんまふなや（イキ）（イよ）（悩）

新歌のごとき歌ふも海をべ〜
さてさてこれとは今八月とう水の
縁語あるかくるを地中をを此句は同
つゝ仏を石ゆ仏の動めをを人
くるふもるべ〜此歌ゆ月をゆ
いこれを此八月ごとく傍訳のこと
あること八月御ゆ

あけやくるかを〜 釈 春山の
くるをいとめでと四海をさもめ
はるど月をこれをもべ用なし
作花のいよの花ぶ成とれぬゆ
をあ〜ゆのまどをまをとこうに
あでこるゆれば月ぶ〜〜
まぶをとてを、 釈 こを八海民
月のゆゆをまばまぶれをゆ。ひぬと
あるれを原〜ぬををうを
うぶ紀めをせねど 潮師 さ紀ゆ光
ぶまりてゆ紀ゆ ゆもまをぶぶと
いひ〜ゆをを。

ごーん 河 護身 潮師 解持をを
をを紀ひをめ。
玉 ひぶゆゆ八ゆのつれをゆの人の
あをを八ゆを月ゆを〜〜 潮ゆゆ紀
ゆをゆいゆ紀ゆ月ゆ

まゆきもゆぶれををぬひぶ聖をうぶ紀もえ
せ稀ぶをゆ動をうしてぶ護身ちんゆゆ〜せをゆれ
ゆをを名のいをゆをすを紀ゆぶるも。ゆををふ
ぶ功をををたゆ陀羅尼ふゆをゆをゆ讃ゆ迎ゆ人のゆく
ゆゆゆをゆ。ゆをゆるゆゆをゆゆ。ゆ禁中ゆ
ゆをゆ八ゆゆゆ。傍訳ゆゆゆゆゆゆ
ゆぶ菓ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
いをゆみゆをゆゆ傍訳河今年ゆゆゆゆゆゆ誓ゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

さんぜんせかいのおりふし
うどんげのはな　河　案優曇華華、
金輪王出世瑞也故云霊瑞花人
壽八万歳時節金輪王遶四州
其時海水半減するホトリて此花
出現する也是を元源氏に待え
さるホトのたとえ因ホ樹ありて
一ツ比冥くあるとあるも法華の
久遠時一現のいと　潮　下ハ源氏
物語さかをかのもめうつほ
うの久るといくよ同ド　槿　華を
ぐ色とめるハ三光あるホトのもちん
さめ中て源氏をぐ初ンド位妻ハを
ケ初位とう新さみ中ざてハ即
こうホうさるおそいくのくと
樹ありて　玉　金光明経讃
佛品ま希有希有佛出於世如優
曇華時一現耳　この文ていくと
おくものさく　槿　おくのはさくあ
る松の葉を希ようあけておぐ見ぬ
花の新を見るといひておぐ見あ
ぬようどんげをふくめて源氏ものを
よくくるくるとあるを見るといふ俗俗源
氏ものうち

ぼく　五十
ぼくふの松れとぐそ後まきふあけくまぐ
見ぬふのほ成みくれそうちおにてん生る。
ひぐ里ほ法まわにごこくてまつる。今ん拾ひて。
僧都　聖　徳　太　子　百　濟　装　束
里てる。金　剛　子　珠　数
ちくてぽ　スグニ　其　國
うくめいくるを。ぎたるぬくろふいまて。
の枝ま法てごん　紺　瑠　璃　袋　五葉松
すわぐどもいまてく養さてふどよつけく。所
薬　入　送　讀　捧　聖
よつけくるはわるぬぐもさくげ生り法ふ。
見ぬてひぐ里ようちぐん。ぐ法ふ

うぐひとおまぐ松の扇をまれ
あけてと云俗ようれをるぬと
いふれのふくふれをうちを法
ふぐもうくくさくく
うちうれて　潮　慈悲ふくべ
どくさるんまひく
玉　ぬるとくくいてんべ一見ひて
ハくく僧都のそれをんくるようのく
ふく寿れ源氏のえあくくびすあく
槿　独鈷ハ菩提心の表く　潮　師　独
鈷ハ行人の常住ものぬくまりう
ぬくのあくハふもなくく
さくくくく太子のく
花　百濟國より金剛子のくうう
くハ元興寺資財帳第九云聖多
迦子金剛子此等百濟國所献也云々
僧　聖徳太子の陽教のくハいぐ
見出ぬ僧ぐさもあくあぐより
きくくのさばくくぐふいいあそ
ぬのくく　扶　一本ふぐくくよう
とくもよくくべいくぬる天公二の補
陀落山より法のくくとくくくくいぐと
すくもくぐ僧ぐきぬのくあふ
くくるのくとんてあくべ

○えんもくくれ

ようくくくく

ハくすみれさちぞるづゝふぱくゝ。
尼君
まゝとるや花のひろわハさちうたとゝす
なる所のそゝきをとんとよゝあるての
いとあてなる袋ぢうちすてゝいるゝてゝ法東ふ
上ヒン　ツクロハズ　ユエ　手
なゝ徒ぢ。おいい後よりいづちともなゝく
左大臣　何方
おそゝまゝにそゝとてぱむゝへのゝ。
今　迎
君ぢちゐどなまゝつまゝゝ法弁ねた
中毎ぢゝぬ君ぢちもまゝひゆゝてゝかう
墓　汚
やゝ北ともハつゝまたり侍んと云ひ給
ふゝをおさまゝうおゝてゝきをゝゝ。
キヨウサメウ　後　笑
みゆゝていとゝみゞ紀後のゝげよぱゞ
オモレロキ　薩

ゝふつゝゝゝゝゝゝゝバ
評　此句法師ふ遠ちゐさ遊ずゆゝ
出ゆゝちゝよ　釋　出ゆゝちゝよ
問ゝとゝ法ゝ侍ハひゞゝゝ
さゝんと問ゝまゝふ　新　さゝゝ
ゝゝゝと侍物も問ゝまゝふゝ
ゝゝゝゝ　細　尼君の方へのゝ
ゝゝちゝとゝのひゝをゝちゝ
ゝゝゝ　釋　下句山をゝちゝ
ゝゝふゝゝを法のゝちゝいひみ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝハ
ゝちゝゝんゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

出ありてもく上の所れあるく夫
あくとと好きうる法くをうしび
とうくの寄れあるうや

河 可津良支乃天良乃赤江名
亀也止与良乃天良能尓之奈
亀也江乃波井尓之良太万之
川久也赤之良太赤志津久也
於之止々於之止々下毒催馬楽
芦城部

訳 その名人先仁天皇の時の童謡
あくと伝る赤の色とうと豊浦寺
はるかやまとーくの寺のの法花経
うつくどこく国ゑきこバ暑きうえ
のこうの複葉井く名おく

玉 ここの井御のおあるふ源あう
人くうくうくあう **風** 山むくの茶
さるくもの新あれ歳上人あれ
ぐも源のひあるてはけ世うくく
いくく新あや

訳 うつくきく
のあるやくてうきく龍ふ見ある
さすがいつ仏のあるう孫く
まうのひちうれあく仏男

湖 うつも赤仏ふひちうれあちて
人あくべー
さくの笛あるせる細ふも仏男
あくし

あるせくる法花のがもあう。伝教きんとうづ琴自
ううめてまおうてこれぐ法てきつあて風流人羽手
ぐくてぬあのぐくふ山のるもぬぐうに伝きんと
きちよやくまへだみぐうごちいとくへぐた源河堪
ぬをとやくまぐどふあくくぐうれおくして。イぐふ氣槽
うれあちうぐ人々ひぬぬぬおうぐてくちをとやうくひあ
き法師ふくくくべも源をおくあつぬま
てうちまふ内ぬいくる居男くちぐどあのぐ未イまぐチレ
ちくふあくくる人のちくさ海をんざりつまバ。
くのあれのれおぐくあうぐとやああう。イ絶
伝教とぬあれなるのあるてかくるちくさ宿縁アイモウ

河 瓠巴鼓琴
琴、河舞而鳴魚躍而遊矣 列子

湖 瓠巴の人伝伝法師より目
をくんをくうの

花 上の伝教れ
ぬれ先源氏をバ伝をを美ふを
つく輪豆カ出世ようをくうあふ世
河あるく **玉** ぬ宝国をやく
いひあるバはやしのあくひくく
はよのあるくいもくくたま
ぐくあう

訳 上ふかのすだ
ちんくんくくうくおびあて
んやとうビ豚くんをつくべー

評 世花ぬをの源氏ふぐあて
ちひつあるつくく成花ぬくくの伝
事くくうぐくてひあのくも結の
半も宝ふくふいでく明あくと
ふあるあくうくをつけて鳥ぐき
すべて伝教の逆ぬれるあううバ
伝法のあひふたくうる文あるあふ
ぬのづくくまのをれ伝線をのくき
きくうふ美ぐくあうのだ

同じくふのあるも
琴、河舞而鳴魚躍而遊矣 列子

湖 瓠巴の人伝伝法師より目
をくんをくうの

花 上の伝教れ
ぬれ先源氏をバ伝をを美ふを
つく輪豆カ出世ようをくうあふ世
河あるく **玉** ぬ宝国をやく
いひあるバはやしのあくひくく
はよのあるくいもくくたま
ぐくあう

訳 上ふかのすだ
ちんくんくくうくおびあて
んやとうビ豚くんをつくべー

評 世花ぬをの源氏ふぐあて
ちひつあるつくく成花ぬくくの伝
事くくうぐくてひあのくも結の
半も宝ふくふいでく明あくと
ふあるあくうくをつけて鳥ぐき
すべて伝教の逆ぬれるあううバ
伝法のあひふたくうる文あるあふ
ぬのづくくまのをれ伝線をのくき
きくうふ美ぐくあうのだ

なぐらいとも源氏の日のかれまのせふせ
ぬ山ぬつくくく

忌々 聖 入 引 身 自 ヒ ヒ ヒ

玉補 ものがたりもおろかなめるこころのほどのあはれなるものをもいとあはれにかなしきものをもいとあはれにかなしきものをもいとあはれにかなしき

ようやいのちぐさ

鈴 拾遺集恋五 下ろす人ちぐさ

うそこそぐ〜こすもえいのちぐさ

あべかりつるのうらもこそもと

友〜集離別 みく人ちぐさ えぞ志

らぬ今ごろ〜よ命のべばとれや

ろすう人やとらぬと

釈 右の古今の歌の西律野釈中も

若しれこうこふうあべし回注

の二分ハ此ごとあること作法よ

いべるぐしこてこの元ハよりや

今ぐふあべばあやるすく人や

とらぬといく〜をつひこハひ多

まくうかをとらんといかこて

ふとも 釈 ふとハ形容の辞

かのとうこのの 釈 かくらひてばと上と

きこうむうハ例の文法

いひとうぐこと 釈 似氣ふるき

こと也べるぐことうふれがちひ

こハいひとうぐこと

兵法のあハうく 釈 あてる

ふまあく人上ふうてまあやうふ

ゆひやうあうハ花やうこうて鬼

らきこと回注ハまぐこ〜ハき侯

とうう世民おもかり〜みぐこくまいおほう。

トヤカクヤ

かのわうこれおひいぐんほどの粉やう〜き

生 出 ウチ ヤハリ

をぐ似氣あいちぐ〜ぐ〜ぐ〜

ふるはめどもよハぬもあやし
（尼君）
このまうみゆあるうさそいいでや
（好）
きてもとおげ　わづらふくてのはてと。
（オキノドクヤ）（ユキガシリノ）
なほざりもおもひのくあるされをぞうそへ
（等閑）（成）（ワザ〳〵）
さもぜおへるにぞさせんうさなる形んまぐ
（トハセ）（ウシアゲナ）
ものよさづをぞにぞがくしうつぎゆ結ら
（難波津）（サヘカリし）（シツカリし）
ざめまぐぞうひあくちんさても。
（尼君）
いのしあくをのくれ様ちぬまぬ後こ後
ゆめるほどのさるのをいとぐうしあ
（ヒトシホ）
ふうとあり。傳都のはうへもあるがさ後
（全本二行）
あるまべ。くちをくてこ三日あるて惟光を

ぞうそまつまるふ（湯）ふ納てのめはていふ
人あ尼ぞ。
（今ヲ）
のるひまくくはていはもかくらぬくるあれはてろ
（知）（惟光ノ）（トコロ）
うれさばうういをけなげあしらるそひを。
（アレホド）（如）（ケシキ）
まはあねどもれほどをおひやも
（タシカ）
をそ。ぞふうはは又ある後傳都も
（如此）（惟光ノ）
かこゆるふ納てよせうて化
（アリガタガリ）（アンナ）
てうひくそくもわのるまふ
（源ノ）
さふ。ぞはるこのはありさまるおぐるる。ことで
言
おはくるるくぞはくぞこうしいひつぐく
（ニッコラシウ）
多
までぞうあれはばをいうよおとあん
（ケナキ（紫））（源ノ）

（秋）ふうとうはのの
でふをようふひてのふるふふ
ゆてのはるのとうるをしは四頁
ひがことあり
まるぎあるるぐをぐふ　河は頁を
半の人ふをいまぐよまぐとふ
はるもあるゆやさるふあれ
京今房ふ郎は侍後寺山の前
をまふらふ人のるぐあゆ
ふくくいるくるくいろはのぐふ
ふ一字ぐうはていまぐ出ぎを
ぐふうきるぐとうふきて及
ふふをのるふちぐきるんるまふ
しきといるく
さても　圖さてもとおへうけてえ
るべ　（秋）はは侍ぐはとさても
はきるふはくうる侍（秋）
あしふく　（湖師）侍のるよ秋の
まの風もうるふくくある後
うはてあしふくくあり上ぶハ
花のさうれすくうのぐふるを
とむるはくるるさといひくはは
侍の世れをきるはまるとうは
ふふ出れふくふの稿れちあま

よろづとやうこうもんぜんまくおげくる。
（アラシ）ケシカラズ　尼君僧都ナドニ
けふこそおもひとけんごけよかいのひてうの
書　今行
ほそのちぐきなんあくにんまりぬ
故　書　ヤハリ
とくまきのみるまは。
ほ
あさくのふかきをうらぬるなぞ
山の井れうあさをうんぱくし。
尼君　影憑　離
くみそめてくやしやとやの山のあれ浄さ
イヤ
なぐやうげ我ゐをなき惟光もおるで
ニ、デ
ことをゆゆこのゆづりひきふすよろし
尼君
くしさのだすらして京のくらもろう
殿　カヘリ
弱ひてきんゆきすべれとまるをんなと
ートヾ

歌　此花を折てうきてうふうん
とあり　歌　此花を折てうきてうふうん
弄花　折　折　折　折　折　折
いとぐうしつめくう
玉　さやくのさうあれ中山まさ
中山　さうせ　さうせ　さうせ　さうせ
うーつめくーとくいとど住民
さのみ歌の手れ風もうーつ
めくくあんとあをうげていう
お納さのめけくいつくあべー
評　上のうはまみの歌よお納さの
めのとをくつあるハとさそさて
あをあしまくあ附ゆくるくれ
なをいとくらくそお納さをた
づくうくくくとあるふくかの
歌の人もお納ふるべーとうう
よおくそせるる歌のくくみひ
ちーべあおくひあり
さもうらあくまるさ
歌　いづくのくもくまくれほ民
さたんのかるをとくるあるくまく

限まてうきてうふうん
いとけみべあうーけくひを
玉補　此下ふとうべ落るべー
くくくあるりーのさまるさ
玉補　くくくハありりくハうべ
下のうるへかくく
ゆくるあるべさ　河　故書くさたな
いうべくくけべけてうべてて一字
べうきくくるあり
まくのかあるくハ　湖　あるも中
ふちひさくくはけべくくまくの
あさくるふうく
河　あさくるふけべさくあるふの井れ
けくらくくをあるのくハ　古今考
拾　万葉十六ハ下句あさくるふを
考ありくるあくく
花　さくのあるはけべをべうくくる
あるくて、はくるふをとるふ仏う
花くあの詞とはひうせてくる
歌　ふの井の井とはひうけくること
法おのべくーなる沖のけべくこ法
くくあるくくくるけべくあるハりてくある
くるべーるけくあるハりてくある
とはくくくくくひ

なくうおあわせて』菊けべの字あやくくるふ
病悩
来あるくて。まくで法くあり。うくくのけべくつれ
（御里）　ほん　帝
ぐりなくべたけくくふはくくくきもいとくれ
ありくうくんなりあべくかくるをあべこと。
デモ　アルハシテ
くんとあくべれまべひくくいべくくもくまう
ウカレ
でくくくくく

[訳] 初二句八詞

[国] 下句ハ歌ノ意ハ神ノ心ヲ和ラケ下句ハ祓ノ心ヲ卑下シ云フ意ト云フ説ハ

[抱] 惟光ノ妻ノ夫ノ方ノ人ノ家ノ系図ヲ書キ出シ申サセ給フ

[訳] 左馬ノ夫ノ方ノ人ノ家ノ系図ヲ書キ出シ申サセ給フ

[抱] 三月四月ノ事ナリ

[訳] 侍ク〻ト云フ形容ノ詞

[国] 三字ノ内ハ侍ハ侍ノ意ト下ノ侍ハ侍ノ意ト

[訳] 王命婦 [国] 女房ノ名 [訳] 王ノ女房ノ名ツヅク

[抱] 王命婦ト注セラレタルハ宮腹ノ王氏ト云フ氏ハ有ルベキ事ナレバ今ハ俗サイフクトセ

[訳] 日ノ下ニ月ハ有ルベキ事ナレバ今ハ俗サイフクトセ

[抱] 日本紀ノ慮計測方便

[訳] 二句ハ

[国] 現ニ知ラレタル人ノ

[抱] 源氏ノ君ノ女房ノ名ツヅク

[訳] 源氏ノ君ノ女房ノ名ツヅク

[抱] 源氏ノ君ノ女房ノ名ツヅク

[訳] 源氏ノ君ノ女房ノ名ツヅク

[国]

やゞてまぎらるゝ日どゞ月ともゞし。とむせうち
咽 嗚
ゐるさはもゝ。はまぞゞにいみゞ。ゝまぞゞ。
アキハドレク
若ゝ
せゞゝわるよ人やゝゝ人ゝきゞゞひあくうゐ
直 衣
方をゝあめゝ。ゝよゝあゝゝもゝ。やゝもゝりみゞれる
モツトモ
さはもゝいゝゝゝとゝあゝりよゝかゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぬをなげきあまりむこ
もどりけんひとつよハ
のたまをぬきて懐姫のふつかり
けめのことぞれ弟多賀姫ぞと
玉 弟と令姫と二人して令婦ハ
王令婦をうらこそふハ弟と令婦と
こどもとこさて物のごまごうか
ろくといふ令婦一人かろくさる
ふ令婦ハとこどもをいろう
源氏君の恋ぬのハ弟ハもしば
令婦のこもれるのかるふかく
なていくるかり
うちふハかのけのまぎれまて
釈 注ハのをまれさりのくて市懐姫
の事とみふハうこ紀ものくてもう
まこどうもあふ奏せざりしとと
ろうもはかるべしと地より許て
うけるくいとをもはまあ兄弟もう
いとぐあまて
源 弟の兄いろく為づかふはうひ
まさうかり
さまうこかる友をうんひて
花 ちこへバ源氏のかの方れ中抜ふ
ゆよいでぬのひてもは位ようせ給

よ〜ぬこうあまでぬ。この月まで奏そうをさせ
給もざわうこ。今おどろはゆゆ。月どの庭
んひとつまも。おどろはゆゆ。月どの庭
きわ。湯殿のもどふとも。親ようはうこ
まつて。仏事のはうこをとも。著くん
なりもれる。乳母めのとまれ弁。令婦おどで
ぬ。とこ。互どうこみふいひあうこべこよ
あこねばおふ。道のぐまがこうかまるはもぐせ
をぐ。令婦ハあさまこと。帝へハはも
のうまれまぐれるこ。サウソク二人讓位
こまのこうこ。奏こうこ。こうふ人

べこきまのはなふあるもうこ
さて物げもうけぬこうう
釈 あくもうる光こ。ハ光ハ口の物を
そのこいさうのもあうこ
万水一光の花と光の詞めこて
丙 はは光を相をきすれバはよ三
人あるし一人ハ天王一人ハ后天
ハ大臣ふぐさうをうふ中
ぞの中ようぐひめあり
勸 その光をありせてられば上を
おうてその恋ふあるぐ花ぐの
ぐきこ〜んをうこうの浦寒の
うつろひのもも脚月松のもぐ
あこて比天のこぐめもあるべ
むくいぐこうハ恋者のさて
釈 花ちふ左遷のもうそふあに
やうふ泊をれさるハこて
しませるふべきこうこ。
左遷のもをきこうこ。
をや 評 比光のたふ源氏君生
涯の後活れ伏まこそうれさる
こうの相書きの相人の泊と同じ
きまこうこやく奏くこうう
まのこふ紫てよくはうこべ

もさのこうこ。ひうこ。いこうぐあそれこうぐこう
おうぬぐさまこく。はつこひこぐひ。あこも。
光ん そこわこうこ。おこおもはこひまる。
中ねのこんも。ぎゃうさんにはこはる
源氏 光ふ源氏ふうひこく。あこもこるものを召て
とこせ給へぐ。おこびあう。わげこうはあ
すぐのまを。こうこを合こうこ。中弁ふこぐひめ
あまこく。はこ慎しませるふべきこうふ。と
いこぐ。こ。づこうこおげこく。みづこ。はこ自身
ゆめこハ。こ。人のはこをこうこあこう。
こうの光あの合ふまぐ。まこ。人こまねぶ。ぬ

のくまひくぷのうちつかぷはるのあるん。
とぬぐ　ゆうふぷこのうあれは半きこのひ
くぷ　さるゆうのや。とおぐ　あそをすあよ。
いぐ　くぷみぐたこのそ成はくつ　ぷそ
まど。合婦もうあぷいと　むくつけうるぐう
ちさま　ちうてぷさ　ふぐぐるべたう半
ちれきひくぐうのはうあれぷむさう
ぷ　ぷとあ　竟　七月ふたなり
てぐ　ぷうるひうる　めぐ　ぐあれて
いぐ　ぷはたひのおどうぎうほぷすう
ふう　うふうわはひくぐうちあやぷも

（懷妊）（合）（アレ）（合）（ツイタ）（絶）（竟）（藤系）（ダウシカサ）（ツイタ）（合）（御慶）（面）（悩）

ふうう　細　怪妊の　王　ぐふ　ふ
ぷ　うるのあ　帝の　ふぐひぷう　ふ
うあ　こあの　刃　天子は　ぷ
ぷあ　ぷあ　花　せもやう　ぷ
ぷのひぐ　風　ぷのひあ　ぷ
ぷ　ぷ　ぷ　ぷ　ぷ

（細）怪妊四ケ月なり
（風）蓑虫を尚
（風）蓑虫
（風）蓑虫
（風）蓑虫

ありてとゝくくらふれのまつ
ゝとゝくんをとゝくべ
釈 あげさうぶ花菖蒲のあべ
うらうゝて 釈 ぢひてらまもた
まぬをゝひゝちまゝるかふかちう
ゝてといるゝるべ
まぐれめてれとく 釈 人を向フ
ゆつまくゝさゝるの時のあべし
六条京極ゝとりまて
釈 ゝれをゝうの極をこゝよ
あゝゝゝう法見ぬゝるの八極
ゝまれどゝふ八れあゝふさど
伏線の用さんをたゝべ
こゝちう 湖 木間之を精の花
きゝゝ白ゝ
こあゝどちのたゝ納ゝの 風 惟光の
法へゝきゝこゝはゝまのれ祇べ
のたゝ上ゝゝゝうゝ
陀 上ゝよゝうゝゝあゝゝゝ当て
今ゝゝくゝふ八光病ゝゝ事養
せゝゝや 釈 上ゝ四ゝあゝゝと
あゝゝ八光病ゝもゝひゝゝ
くゝふれゝひゝ極のゝくゝゝ
ゝゝるゝ

もゝゝとゝゝるうちにこの月ゝ八ぽゝしよ
まゝゝるれゝゝひゝゝこゝゝ事ゝくゝゝゝだゝ。
秋のゝゝゝ

ぞふうゝ不ハ　弄　所もあるひ
まうねさまうおぼうさま
所のふそひのへうちあぐゝ
万　所もつゝよ所あるゝ所にと
みぐりのせどもいひうのあぐと
いまぐをさふにとて世間つまふ
ゝまゝバつゝまうさゝよ所のぐゝ
尼ゐのおりゝせのあをもまちし
めさねとゝ
みぐうぐちバいつもあゝゝゝ
孟遠伝のゝをを内うう尼ゐの迦
ゝゝ　釈　みぐうゝちのあやまう
さいつゝもあゝ夢のゝふありれ
バゝバゝともうゝも行れ仏陀のさあま
あてかゝ不ゝくふひうへふゝ
づゝゝ誓願ゝて虫ゝよゝ人ゝ不ぬ
ゝゝと先ゝ後ゝを謝ゝのゝし
ゝうあにようゝひゝぎ行て
細　いゝげるにゝ年齢もゝさあり
てとあう
うずまへさせうゝ　万　所のゝにゝ
の報ふあゝゝゝとゝ
祈ゝひ行ゝにのゝど　細　後生の
さゝうゝもあるべきとゝ

どもかへゝ（源氏）ちゝんハうゝゝとて南のひ
さゝひさにゝろひゝくいまちゝるいとむつゝ（女房詞）（ムサクロ）
庇　ぞよ行ゝあまどゝ（イ行まで）かゝこまわをぶにてあん。（オ）（レイ）（デモ）
ゆてわあゝゝ（シウ）ぬゝゝにおゝ所よあんとゆゆ。
げふうゝる所にきいよまどひくおぐさゝ。（ホ）（モヒガツケナクニ）（ナルホド）
づゝよゝひゝへゝちゝおゝゝゝかひあきさあよ（訪ふ）（紫ノ一）
のゝゝあてあきせゝふゝ所ゝまれ行ゝてゝん。（ハヂラハレ）
なゝゝ病悩せ所ゝをもかゝゝもうゝ所
ちゝゝざわゝるおゝつゝゝさおゝどゝゝてゝふ。
尼君伯女房詞　みぐりぐゝちゝいつゝんあゝのゝ行ゝゝぐに（イる）（命）
終　ゝのさあゝゝあゝ行ゝてゝいとかあぐゝけあく（アリガタウ）

いゝちゝゝまバ
細　祈ゝのさあ行ゝまバうゝいふ
あゝゝも所のゝのあゝゝゝぐ
ゆゝてゝうゝてゝゝきゝゝべ
はゝゝぐふ　釈　世ゝよゝゝゝ
かゝゝゝゝをもゝゝすゝべきゝど
の年あゝバうまゝかゝんとあさ
あゝかゝゝゝまゝゝ礼をゝゝとゝふを
あゝゝあさゝゝゝひゝゝゝんゝあゝ
釈　所氏ゝの詞ゝひゝゝゝゝゝゝ
四位ハひゝゝとゝあさゝゝゝあゝ
あゝバかゝをゝさあゝにゝすき
ずゝゝゝにゝさあをゝにゝなんや
とゝふゝさゝ
いゝあゝゝちゝゝうあゝゝゝ
釈　ちゝゝうハ所のゝあ所ゝいゝあゝあ
せのゝあ所ゝあゝんゝゝあゝゝう
あゝゝゝゝそひゝあゝゝもあゝゝ
あゝゝゝゝゝまでのゝかゝゝ詞ゝ
ぬゝゝちゝ　国　世のゝゝゝゝゝゝ
ふゝあゝゝゝあのゝせゝゝゝの国所ゝ
ゝそゝゝゝゝ世のゝゝとゝ所
ハいゝゝゝきゝひゝゝゝゝ
あゝひゝゝゝゝゝちゝゝ

ゝゝゝせゝゝゝゝゝゝ

釈まあうてもうひあさこちのく
ちるをぞあてはさ上のなをぞまゆ
んとのさきまく
よろづかりりもぬさまゆ
国尼君のいくよるろろること
あどをもいらもねがりいまあよ
しのさろう
まこゆるをうしも 釈ろうう
ちりたあよさ上はねいて乗え
ゆとらひあすをひもいらふく
さ上のこのさへ出来のふくち
さあたぎまをいとろくうつむ
らまづろうくもさうおるきあく
うんて 釈さ上の尼上を呼け
まふ何くそとふ何のまく私の
私まはをるぐとし私もそびて
うう後よはあくぎて
この手まあ上 釈かの中尼
手ふあしとろ〻のはめさて
いぎろうぐく 釈いぎの河
譲注のごとう尼君ぐの源氏君
をろうぐんちのあさもあぐき
こうとのまひうまをさ上のゆ
おがくをうてうこたのすろう

浅 いきさう尼君ひ（イキ）ぎんこと申ぐ
しきを海をみ（ミセ）をまゆんぴうふるちぐらふ。宿縁 今ノ
見まうそ申ぐよりぬおられよさひゆ申も。
あゆ（フシギナ）ぬまでこのぎれまるたおぐく作ら
ぬなどのこ（今ト言）ぎうまひく。久保河
作る後ぐれ出ぎけ申ぐこちのこし
いうでぐ（今侍）ぎうのまへだ。（サアあど河）いでや（イヤモウ）よろびおぐ
きぬさけ申ぐおりのごりうりてなぐ
ゆゆるをしも。（彼方）ぐるこよわこるおとて。（来）
ぬ（サア河）うへてぐ。（カノ）ぐのちるふありし源氏の君てれ
尼上
ちゆ（シン）ふまなどん後ぬとのまを。

○北四

とろひく今源氏君のまゆ
をもうをんとてちるあてのさ
まのさまく幼きくのさまをいと
ようくうつされちり
くのろうとろひられば
細源の羽さ上とおゆ人性
くくろうげよろひくるさまをみ
しゆるおふゆぬさぬみりゆ
ぐふいゆろひよの
底尼ふひぐさまゆぐとくまこと
ふいさけあたぎうふぐろうく
をうくくてくるたよう
まいのちひさて。 釈いつゆ
ぐくぎさ上へのはみはふくく
いまうゆ
いさけあた 釈上句はさ上尼
一方をぎるくをひを携ふを
てゆのめうくるく私は源氏君
ぐうろのくへあう
国あまふあづむはひあむ
をさくうえゆぬは後ろぐ
ゆてゆひかやむてこの後ろぎ
ろまくくえふにをゆきてう
えちゆぬの日涙ぐもぐうく

○えむ〻ろ記

人くいとかがぎろいろ（アヤウシナ）こと思ひくあふろは
ゆゆ。いぎ（ぎう上句イヤサ）尼ろ
とのひうばぐうんちのいうさあぐさこた。
くゆとゆぐくのおふ（源）いとをうとき
源へど人くふれる（メイワクナ）と思ひれば。ゆぬゆう
まく。まあゆ（真）ゆるはとぐうひをゆ（実）おた
源ひてかくるひぬぐふいゆろひゆの（源）
ちひゆさゆもいとようをうへてんと（教）
おゆ尼ゆ
らひゆ（アクルヒ）ゆ日もいとまゆんゆうよゆぶ
源いとけあた生ぐのひとをんきくしよう

あまにあづむ松ぞこえのぬれがゝ人まや。
蘆間
とこさらをさかくらしなゝ人もい
みどうをうげあれバやゞてはるなを
人ゝゆゆ。お物てゞやゝる。ゝとせのつる
たゝふをもすゞゝげあるさはすて。山
でゝよまゝわゝるほゞふゝ。ゝとゝせ
ゝ。ゝこゝわハゝこのせゝゝゝでもゝえ
させん。とゝあゝいゝとゝたゝきゝとゝゝゝ秋の
ゝゝ屋ハゝゝてゝんゝいゝまなゝのゝゝゝ
みゞゝゝ人ゝのはゝゝゝゝんをゝけてゝあれ
藤次郎
ゞちゝるゝゝゝも。ゝゝゝゝまゝゝさゝも。
夕
呼詠

ゝゝ人ゝゝゝ　拾遺　注　後人の手
ゝゝゝ松ゝゝゝゝゝゝゝゝ同ゝゝゝゝ
ゝゝんとゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ古今
堀河ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

釈　此ゝみをゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

形代のようそんかの宮に奉れと
いふやうにいひて帰きぬる
十月ふ朱雀院の行幸あるべし
跡朱雀院ハ後院ニ天子脱屣
のほれ物なれ不ハ三條朱雀ふ四
町を造ニ出さうり延喜の頃字ふハ
宇多の法門を朱雀院とぞ申す
十月の行幸ハ紅葉の御賀
釈この行幸の御賀
ぞ申もんてをのいとふこれ
見ん事ハ
せくこうつぶくる限意の法
あり程をこれもいあべし
やんごとなる人ふのこと
岡華人ハ摂家大臣系以下の子
どもに出るをこれハ源氏四位
ねるもまひあひし
そのうらは 湖華ふの方ふ
とうぐのざえ 釈ざえハ才芸
音楽の芸用をさん琴笛ろ
いろの芸をあ〜ひあ〜あ〜ひ
ふの下ふ物ふ〜ふ〜ふ〜ふ
ハ〜ハ補ひつあ〜てふ〜ぬ〜
いとまあ〜の〜ふ〜の場ふ〜

おめ〜いで。ぬ〜ぬ〜つ〜ぬ〜ぬ〜ぬれば。
傷新の〜ふ〜
廿日ばかり〜ぬ〜ぬ〜ぬ

なるれ。あかづ〜そ〜きく〜よてやまづ〜すれ
ちんなど。そだのひぬ〜も。よとあにおびし
おぢぎつる〜もちるき事おく〜ゐるふ。ぬく
かあぢけあ。あたなどの事とれさ。ぬのぢん
とと〜どりやゝさせぢ。とうまて〜うおひ
きへらきあぢ。ぢきぢをりふ〜よゐわなぢら。
すうとあぢ〜ひあるきもよもおゝ〜ぬ。
ぢぢ。年よりもとびくなる〜ひのくまで。
いとうゝ〜ゐ〜ゐ〜ゐるとゆゆ。およかう
ゐうゝ〜ゆゆ。ちゐるんのぢ。ぢ。ゐかゝみ
ぢ。ぢんぢ。そのいゐひあされるぢのおそ

軽 慢 交 過 危君 常住フダン 著 多 激 准 幼 習 保河 操 返ナルベシ 宿 縁 殊 傳

そうぐ〜う〜ねぐ
釈 源氏君三才の時亡れど
いと〜おぐ〜るて〜く 湖 祖母の服ハ三月
服ハ三年月し〜て〜ハ三十日ハ服あた
る〜く 画 世ちと京へ出ぬ〜
もとの形よ 底 ちとあし事の
ひさ〜ぬぐ〜
〜ぐ〜ぬ〜 釈 後ぬ〜ぬ〜
こひめ〜の 釈 世ちと上の変母〜世を
を〜ぬの〜と〜て〜ちる〜ぬ〜ぬ〜ぬ
ぬさけぬ〜ぐ〜ぬあ〜ひ〜ひ〜と
いとむぢ〜と〜 画 眼 二ぬ〜ぬ
歳三年の時ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ
ぬぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ

あげのはしとのもてあそびいろふそそ
ろうろうへいひそろるのなどを
行ひつゝ侍んとのさまをるくうて
んぱうくうほどもなるひごろも
ものうきわびしのみも　釈こゝを
源氏ものがたりのふるまひのふる
ときぐさにと著々まびく侍ひつ
あるものゝ　釈ぼうとふ者
はちくくもぬぐふうぞう
はちまふうるぐさうはいとふさと
あふをふていてうとくれといへ
るこゝろの浦ふぢうの姫きをよ
てへ海ぢよりる日をそてるくゝ
その浦の花搭きのごとく別花ひ
王　結ひくへべさはひとのふべき
をうくるはちはのうくはそていぐ
よりはのうく　釈よりる源氏
君のけんをもあぐてあびき
ちさうひのうへんはうはるるまあ
ぢやとふさをゝろの浦れはふ
よせていつう玉藻ハ海藻ふ丸き
実のはるをいうと先をいはうは
あびんこはうる皆三藻の孫ゆて
上のかれはをうけるこゝろの

ぢやまひくぬ泣郎あるうまへるふはあそびるに
どものなりきるへのおるする父君六字のた
ちまれあめ直衣とゆあまこバ起出おきいでゆひて。
お詞てよなるきるうつんハいづ。家の
おそるうとてよわおるてるはこいと寄
らうこ源句めよハひるおどまるゆもりも
なつ屋カハユラルとあるぢこもちとのるまをぱ枕
づかわしん源とさひがふゆあるてあ
ういひくるゆとゆぢてめのふさ乳母
よわていざうさうゆあるたふとのこまんば。
今源句倚さうあどきものびるうんこのひぎもん勝

浦ハあるの浦をうゆてはをを
ふあるハ勿論ふ四宿ふてう
すのいするうぐう　王　ふあぐう
ふるべきうハとのこまふハうる
ことふとるふう
はこゆるれるふ　釈ぞて雅を
竜をおどいへぞうぐくゆあれ
ぐぞのうひのをひるすはつう
今俗某ものかりあどいよちに
はちをあひをあるつせさふあ納
うが拙あれるをうて竜をさを
あどこるぐう　河人ものるに
ガハいをひるも来をくあるこを
ざうんあふ板の雲　鉦後撰集恋三
伊尹朝臣神内人れぬ四月あど
こうぐこれとあ　釈こうぐこれ
を越ざうんとて引るふ俗の者を
恋ざうんとあるかいとうろふ河
ハ拙ひるとうるのるるしまて
このさいををくあるはをと
いの雲も越ざうんとこいてをし
ここあるびがうにるども
風はふの市遊びのうざどもん

うへよはこのめごめまてよいまをこてよりのへ。
とのまへぢめれとのはれぢてをかうよづう近乙
ぬはけどまてあんとてはよせなりられバ。
なふぐもあくゆるへるふまをさいまて
さどうあへまぢなよるうれるはそふこ
ハはやくとかりてすあのぬさやうて
はどうはそまこるるどいとうこう
ひやうあてをうへまバうて例
あへぬへのかくちづにはへるたおそし
うて。ねるんといあのををてちひて初さ
いうまふよつきてずうへくへうハまろ

おりゐてとゝのつくも　湖　赤も他
人とゝのひ給はぬもあるものゝ
さぐりかりしへと　釈　上ふゆまふ
あるてゆきてゝ給ぬとゝのひしへ
なるまバゝぶにろしへとゝいるゝ
ゝかゝをつくべし
いぎう　新　いぎハ率ゐ引うハ
ゆゝ引ゝてゆゝらゝのうゝ同
ゆゝさゝよ　釈　眠痛のさて眠の
まゝきゝさてゝの又初児のさ母
ををゝげるゝぎう
さまバゝて　湖　ゝ陸ぎよいまぎ
かゝいゝゝひまゝ陸ゝまゝまゝ物を
と乳母のゝゝゝ
ゝとゝさゝられてゝぎうゝ人まバ
湖　上ゝまきぬをゝのゝとうゝまゝ物ゝ
ゝゝまりひゝゝまゝとゝまゝて盤をさ
ぐりゝまゝるべし
いゝとうゝゝうゝゝひゝゝゝる
秋　少物陸のゝゝの女ハ盤をゝれ
てゝまゝまバ行物ゝゝも先盤の
めゝゝゝゝをゝめゝゝゝゝゝゝ上ふ
ゝゝ上の盤ゝゝゝをゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ孫ゝんをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝハ

ぞゝゝ屋ゝゝ人おうゝゝみゝゝひゝゝゝゝゝゝゝ。
全乳　莫　蹂
めゝゝゝいゝゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ようちかくひのひく。いざのうへよりそき
絵などかりくぴいるあそびあどもてるかふと
ふかくべきこと成のふるもひのいて
なつるをぴとさるたんちもいとうも
かりぴたぴたぴたにむつうかもいくぴ。
みじつだあたまつぴ。かひとよ風ふたあて
よぐるかくおもせざしまりぴりうてむ
ぴううしまぴ。おるぐくはうつしたわぐふ
おちしまやぴ。とさしたんきたりぴん
のとはうしぴ。ぴめるまたいともうさ近ふ。
風ふうしぴやうるふ。かふうぴ出ふも。

（添河）いざのうへよりそき
（サアオイデヨ オモシロイ）
（著）
（ムシヤクシヤト）
（臥）
（ドノヤウニ）
（ヨカラウシサヽヤキ）
（ツカハシサニ）
（近）
（紫ノ）
（キ）
（ツ）
（源ノ）

まくまろ
同じくはうつしたぐる
（釈）ぴの年れおるある程あるバ
とさくくくくく女房ぐのいるべき
河つきぐふまろべ
あのとハ（評）乳母のんをひんるぴ
風ふうしぴやみくるふ
（評）風ふ〜止て出のふとある年の
まくぴ今も礼歌くぐとし
弟ぐぐぐあるや
（低）よのつぴれきあぐめたるとし
今ハまして（釈）かくんるひての今
まやしてし
ぴくまあぐめ作る所ふ
（湖）源の程作ぐまふ二条院之
いうぐ拾おぐしのハぐうう
（釈）法年ふふうとあまでくる。
の程ふるれバ今ハ一なふようつけ
ぴとあるやりている程ハひぐ
こくぴのかくてのくぴるのぐ
いぐハ拾わぐしのふぐるぐきとふ
ぴうて名ハかてきハのるさのく
氏氏年かるるうて（記）十月廿日
氏氏年の中程ふうと氏時なやぴ

（添河）
（カウシテバカリ）
（ドウシテ）
（オソレ）
（イヒツリ）
（お納言家の河）
（父宮）
（添河）
（ベツ〜ニ中テ）
（味）
（我ソ）
（撫）
（顧）

おとけのぐぐいなりやいとあちれかんなる
法あるさ法をぴ今ハまして〜ぐ時のまもれ
（紫ノ）
なつるれくぐぐ。あまくまあぐめ作る所
よわるう甘ぐんぴくくのくそいぐ拾ぐ
しのハぐりぐ法ぐぴ。とのくまくバぐぐもれ
ある。ぐぐ法ぐ法ぐあまぐぐぴ法年九日ぐぐ
てやぴなぐとぐひるふるぐぐ法ぐのもし
（逆ヘシ）
きすぐるぐぐぐもぴよくくくくるひるくる
ぴぴるぐくくくくくくてうぐ。いまよ
（我上）
ぴまんまぐぐあさくくぬんぐくハまさりぬ
ぐくくんとてういるぐつぴくくくちまて
（撫）

朱雀院の行幸あるべきよしのりたまはすれども

釈 兵部卿宮は父君にておはしまし

くまもせどきやはたはたの方かはなりてよるもくしあひさらぬ

へまじかるべくうくあやさん

とぞたちいさてうらうぶり

今ようんをまとど 玉 衰へぬ

ふ今ようそめてたまれども

うかくこもりて 釈 いとなもく

顔 まゆさまく

いとうつくしうもされる

評 きうは用ふるとは接きふく

ちうぶとしは吹やうてきりうれ

るをいとまうしるをのはたはの

きさきひやうかきまてれ

ゆさうもうくとうり

いとあはれくうのひのようのうく

玉 此院を宮とはうまれ

けるうもおりかりぬべたはうく

いひてまをは上効きあるようをけう

ざうしくはやはくうひ女のあるを

つまとのみて はは此院あはのうぎ

つまをておぬくうくとのくあるて

ことをうくはく

あさぼらけ 細 嫉妬門傍島

歩くうらせてあどりのあうり面白

釈 此君傍を歩の嫉妬門を歩りれ

うきまるあまをてをかあまふかりう

うくふあくはくうをうくうをの

まうひあも嫉妬門はまれぬをひ

出れて行るぶうとりのうをのえ

まうひはをのうちておのうくく

たどくりををいはをふはをま

ようまりてうとりるはうし

あううり 釈 おりあてなひる

きるぶうへ 万 ちうのうふと

上あるくうもりふたうくを

うちとうりうく 新 をのまれた

の隔ゆてるうくはたうふはをあ

どくはたうべもあくはは方

ゆをはまどひてもは嫉妬門をはちち

よりうふやとまはたとうぶく

とをとをはをうあり 拾 方のま

ぶきとは君のはをとうべくうをせ

ぬうは姫のとくあれはりふをてま

ぶはとは万はふ前嫉とあうきを

まんのうはくをくはのとぶくは

出すひぬ。いみどうきりうとまうる方をと

ヒト、ホリナラヌ 繋 想

まちぶくぬよ。おれいとまうりはきてま

くのけさうもをうかりぬべはよさうく

サビシウ コトタラズ

しうをひはをはいとをのびくうようひのふ

会(ア)カヘリモラ

とをはのみちはうくをはりいでく。門

ニアリ 会真家

うちくうをうせのくどやつるくあうひな

敵 会(ウ)ヨリ

くくはたはのもふうをあるくてうをせのふ。

会(エ)ヨキ

原

あはりけ旁うのまのようひのもはは

イバウチル

すぎぶはいもはかどるる。とふうをうばうり

二返

うをひうるよりでみくるをもはうく

イヒ

をいぶくく。

キノキ、タリゲナ 下 仕

出もちとまりう旁のようはをぎうくは

イキ

そのはぶくはたをもせでとひうみ

ていりぬ。又人もいでうねばへくもなをを

イモ 帰

あるをまで。明ゆくをもちうをうへは

フツガフニテ 二條院

ををりうるくのなぶうをくく。

紫

ちぬををりうをはりうをはをはは

ひうをうつはまうう。日をうをはは

咲 独

とのはりはくく。又やりのうよ。かくはき

ツウイ

をのをもはいあくはぶ。学をうちはは

ツウイ

すをびみはへりぶをうはをはをやり

アンジ 繪

のふ。うをはをはりををはをはりうをう。

紫ノ方 今日 父帝

近年来

ヒタ一タン

後撰集に いかでかは つゆをも
秋の草 おきてのとぐ のさるべしや
ゆくもあきはなるまじ
釈 かくらひ ひかりさるに ゆくもあ
時あるまじ ゆくもあきはなるまじ
てといふこと
たとへば ごとく 玉 さぶ おれて
ゆくことを かくらひ おれて ごとく
てゆくが おれて ゆくこと
ちるといふも しぶちるの ゆくこと
ゆくが ちること 同
かくべきこと このつも 細 言の葉
おのの ゆくこと
さて出べき 同 ものと
すさびみの ゆく 釈 手をそ
おれて 手 すさび
いくつもあるさみ おれて ゆくこと
をゆくこと
うくこと ハ ゆくも
釈 ゆく。もとゆくハ 源氏 君の みや
やりの ふ。もとゆくこと
ゆくこと ゆくの
あふの 雨 おれて ゆくも
風 野をぞ ゆくこと

ひゆうものの ありて 春の ゆく
よさび ゆく 春 ゆく
いつでゆく ゆく 千ト ゆく
なほ ゆく 父君ノ方
せて おれて ゆく
ゆく 侍 マクツナ
あまて ゆく
しの ゆく イツ 旬
なり ゆく
艶 ゆく
ゆく 深 ゆく
ゆく 香 衣 ゆく

よみ ゆく。とゆく ゆく
ゆく ゆく ヤヘヒガチニ イヤヤナシ 年 フケ
ゆく ゆく ゆく
ゆく ギニ 疎 ゆく
ゆく ゆく ゆく 継母ノ北方
ゆく ゆく ゆく ゆく
ゆく ジセツ ゆく キノドクナ
ゆく ゆく ゆく ゆく ゆく チトノヘ
ゆく ヨウヤデ ゆく
ゆく ゆく ゆく
ゆく ゆく 三宮ハ ゆく
ゆく ゆく 危君ヲ ゆく
ゆく ゆく ゆく イヤヤナシ チヨト
ゆく ゆく ゆく イカサヘ
ゆく 面 痩 ゆく
ゆく ゆく 貴 美 ゆく。

ちぐの ゆく ゆく
ゆく 釈 この ゆく ゆく
ゆく ゆく ゆく ゆく
ゆく ゆく 釈 ゆく ゆく
ゆく ゆく ゆく
ゆく ゆく ゆく
ゆく

ゆく人とゝのふなるさうもわとちた。
今ハせふあたへの市半ハうひは。ゆのまに
きてば。あぐ（カツテ）（尼君）（ハ）（ハウヒ）（ハウヒモ）（心ヨリ）（ホホセ）
かつをまふ。いとんじてとおぼしておい
まへだ。あもうちあたまひくいとうこん
ないわ。ひそ。ふあはしまんちど。
（帰）（泣）（羽）（入）（草）
くこ。こらくぐ。ひぬ。おどう
もなぐ。きめぐこうあたぬまつ。ちさた
（慰）（スカシ）（スエ）
の月れあんことおどもぐ。おぐ。ちこ。
（デモ）
まぐ。ごろあちまをりなう。
（年）（来）（尼君ニ）
まつち。あくぐいまとあたんとなわ
（ツキモツレ）（ナレ）（七）

人のみのごとあるさ角を
いとよくもとれさうあるもよ
ほもちぶるこうちもと
ちちさあるをるのう
釈 尼君ちとさあるをるあく
ふうちあひこ。
あたあつう 釈 あつうとあく
乳母もくもとあるをあくめ
さるあう
あるくべきを 風 あの惟光そ
仰つたされる何
きづあく 釈 世ての月れ夢じ
らきてんあらあぐこたさて
くのあく 釈 すあち惟光ぐじ
こうあきまて。 玉 うてめ
ゆてもといさんがごと四ふさと
へほの夢をのこうあきふ。ゆみ
よてもといるふぐうかくいん
河の伝をあさる泊くこうあ
ことこいあこぐ
ゆのきぐめよ 孟 ゆのきぐあふ
妻あぐふかりてい兵法の中じ
めてはくこて山彩推きべたとえ
釈 きやうに妻ぐいあべきを海

○光源氏

ぶひよそ。とおぐたぐいみぐたよ。をき
あさはこうちあれど。むまつとゆぐあて。
（コトヨ）（胸）（塞）
きいのやうあもあそびあうびるハさても
（イツモ）（ソデモ）
まぐこちをあぐきとふれぐ。
（夕）（暮）
いこぐう。こつくしこのくバかこてハいこぐうすぐ
（屈）（クツタクシ）（月日ヲ）
ろくん。となぐきんうびくめれもな
（乳母）
きこたう。君のきあとよう。惟光をき
（源氏）
てまつまこのこまあわくべたを内う
（原ノ惟光伝）（参）（来）（禁中）
ぶ。あればあん。こぐこうたなも
（召）
もちづいなくこてとのあぐなれこう。
（侍）（三参ニ及）（直宿）
（お）（ア）
あぐたあるもたるる。ぶ。ぶれまくを。
（グアヒノワルイコト）（カリソメ）

あるべき人をおぼえたり本意あるべきよあらずとを恐あまりたのさまるべ

あるべきこと　万　光君ふるまへくおのれのごとも父君の仕出のまま又世なる人などあるべきをけ

そまたべ伝も　玉　それとハ今めのぶるのの類をさしてのるべ

あるべてのちや在りて月日を渡るをいふ年月をもつて世を上成人しのたと後ハ

さるべき世の孫のごとくく夫婦とあるもあるべんとべ

ひとるべあり　釈　おげあきことをあやうもくるでやのすよハいるあるはもも無へべたをとひよるべふるとるべ

うるべつやそう　湖　さをふるしろめるたるあくつへよとべ

ちをさあく　釈　世ちをやさあくるべてなんをよくれとあくうべげよとのさべ

あめのちでやんこのはべそよ（源）ふきうこと（コトハ）

めつけぞ。

罪

みぞさいなまれまきんおるべこのついで（コト）

（セメラレウ）

侍

ぞ。ぎうふんくれ（父君）ぬ。ぎうれる（ソリヤウ）

よ。いそけあ（ムヤクハイニ）（ベツニ）（イヒダシ）くうち出やべさせるべ。ど

いもの。（紫）ぞきをバ伝ものぼ。べぬぞ

あさ。ぎ（イヒガヒナキ）やお物べハ惟光ふあそれ

なる抽後どのべ。たりべくのちや。然（在狂）

宿世

ぞきはぞ。ぎ世のぞ。ぎ道やべ。ぎ

あんぞ。ぎいまハかりにもていとおげ似合

はまとんなるをあやうぎ（フシギニ）（源ソ）のべ

そるもいるあるはんようおめひよるべふう（アンベツニアタハズ）

ぞ。ぎ（アキツ）ふもこやわべ。ぎ父宮せるひて。う

ちやそくはるべ。ぎ（カハシゲナク）（シンスルヤウニ）まつぞ。ん（ムフンベツニ）（紫ヨ）をさるめて

ぞあるおとこの行いをはるもいと日ぞ。ぎ（コンロツカヒニ）（丁）しべう。

（乙）ヒトホリ

ぞ。ぎあるよあわ。かべ。ぎはぞ。ぎ好色（丙）そひいで

ら。ぎ一体ものつる。ぎ（合ヒヨ）ぞ。ぎいひくぞ。ぎ惟光ひくも来ものう

ぐ。ぎ（サウ）ぞ。ぎやもこ。ぎんなどあ。ぎあ。ぎれぞ。ぎいべう

なげべ。ぎべ。ぎ（キガオカルレバ）をもいひあ。ぎぞ。ぎ夫大（コレミツ）もいの

（メイワクサウ）

ぞ。ぎるべ。ぎたのべんとんはべ。ぎべ。ぎ怪光（カヘリ）ふう

てあ。ぎ（合ヒヨ）ぞ。ぎあ。ぎぞ。ぎやべ。ぎそ。ぎ。ぎバ。ぎ保あ。ぎれよあ。ぎ

やべ。ぎれと。ぎ。ぎ。ぎ（サウシテ）ちてべよひ。ぎべ。ぎんも。ぎすぐに

（イル）

そぞ。ぎはあ。ぎるべ。ぎもちべて。ぎ。ぎ。ぎ（ソコツラシイ）。ぎ。ぎ軽々べ。ぎ。ぎ。ぎ

ひぐめくらること。人かやしわきうんおどつ
まりたる水はきバ。きぐむ（迎）てんとおもわれはな
ハきとびくなきこのふくるれバきんの音（暮）コヘミツ
をぞてきつれるふぢ（障）みの日ものありて。
えまあるうこねをおろうのやちおどりこあ（お猶子の日）
よわうきてめもうにれむ（迎）人おこのたてせうう（イもうナシ）
つまてぞ。ムあるもてくしてくあんとうしばの（年来）
よわぎて（生）きこをうきちんをさしがふむおてう。
さぬ（侍）ふんくもおもひみぎきてとことず（侍ル）（言）（寡）
あよいひくをきくけへらちびおぬひ（イひ）（アンマリ）（縫）
いたなあ（宮）ちるとちどちるるれバ。ふわ（ソブリ）（著）（カヘリ）ぬ。

支見加山乎已衣乃乎已衣安（キミガヤマヲコエノヲコエアヤ）
ホ与支ホ世留こゑハ常陸なる女のとよりけ出ふどよりゑ（ヨ）ハ来
る男ふよみみこるふて名れ
こハ恋ハ田を作りてて義き
他ずハ知れより見がきまね
百ふあどんありて他男をう
てゑハもちと恋ひやしあんん
ハ山をこちてかるゑ面和ふ来
きをるとよあるくさて今国恋忘
のうこひすくるハふハ武蔵他の苅
田をこてつゑてとよあるどく
あどゑハあれよあどゑありとお
がそるや萱上のとみわも野面
しあらぬくとよこうあこまてく
ほふま指ものまとあるハいと拙
どわくこふよりあさてくく
をさあれ人をぬすこうく
玉 ふのえふこちてほふむちく
出さくハあここ出さうとよあ人ふ
いとなべ〜さ〜ばりこへるてぬ
これおとくうく
車のさうどくさあどう
潮師 々ふち夜ハ笠間の車数さう

あつまとハ和琴のすく
新 筆ふすどれハ雙の弓をすど
とうく片撥こふよ賛へてもちすく
丘雙六をそどらくとうへる例をも
ひらちよハくをこてつくま
玉 風俗常陸台の比太知仁波太乎
已買川久札安太已々呂可奴止也

釈 葵上の方へ此時ふこてせ紅
つるくのとこう所ひこるふあ
らばさて女君の料面ものあ友
ふ和琴をしすこ〜ばるふく
あづまをすどれく

釈 あまう 釈 あまう
惟光をもあ〜そ〜ぬ〜ど
して出ちち支度をするさあく
ちふふ物そ〜ちるる

釈 つもこうもこ
惟光をもあ〜そ〜ぬ〜ど
して出ちち支度をするさあく
ちふふ物そ〜ちるる

釈 もこふんを
くあるくるく離こ枯をち物ちる
茂この縁
をもく〜あへ〜ちいば

ぞくをそのまゝおさゝれあり
つゝのぶへおきせんと惟光ホのさ
まを 釈 さあ〳〵とあの詞をお
りあホ右の流ろ〳〵ゆら細流弄ゆ
ぶふそつくろふべきさまと惟光
そゝべそれバとあるハいゞく
おまてこれ 玉 捉て〳〵あまこまて
捉よといふとく〳〵
ゆすくありて 釈 女のはれとい
ふこまて世評のこと〳〵
人のゆゞぶふ云〳〵 底 ぜゝよ
ぶゞうゆすゆゞの女ゆ〳〵バゆゞふ
むゝくとうゆゆもつねのゆれハ
くゝ〳〵〳〵ぶこまハ年歯のゆつ
ゝゝ〳〵ぬをいゞとゆひゆゆ
釈 抑〳〵れぬゞハそそたゞ
のせんの推量もてゞハゝのさゝ
女ゆゝとゝの
釈 上文を受ひゝう照應いとめて
いとせちよゝるべきゝ
湖 ゆりこハ二ゆ院ゝゝの方ホ源の
ゝゆゆゝゆゝゆゝゆゝあゝを先ゆ
ゆひて入ゝゝひゆゝゝバゆゆある
ぞとゝゝう云〳〵

詞 あつさかゝふゆをちん車のさゝぞく 装束
暁 更
ちゆゞゝうゝずゆゞんひとりふゝりおいせれ 紫ノ方ヘ身 一人 二人 今
きてゝひれとのゝふけゆゝうゝてゝちゆゝ 惟光
いゝよせゝ。ゆゝおゝてゝたゞゝたゝゝ ウハキラシイ
あゝべきゝ。ゆゝ人のほゞゞにゆをゝひゝ。 イモヲヨシ
女のむゝうよゝちゝゝゝとゆゝ 方ナ 年ノホド デモ
ゞゝくハ。よのゝたゝひゆゆ。又ゆのきゝ称いで 通 推量
ゆゝんとゝゝたゝうゝすゞゝゆゝべたを。 ツウレイ フツガフニ ソコツ
とゆゞゝゝみゞゝれゞゞゝたゝてゝゞゝゝてゝゝ。 トリハヅシ
いとゝちゝをゝゝうゝゞゝゝバゝゞゆゝふゝう ザンネンナ
いゞゝゆゝ。女ゆゝゝゝゝのゝゝゞゝゝゝゝゝゝゝゝ 葵上

系図 ゝゝて 孟 左度のゝちゆゝ
ゆのゆゝ体系ゆゝ
惟光ゞゝゝを 湖 ゆゝびゝゆゝゝゆゝ
ゆゝもゝゝぬゆゆ
孟 ゆのゆゆゆとゆ ぬ光のゆゝ
ゝれバゆ車をゝゝゝ
釈 ゆゝもゝゆぬ光のゆけゝゝゆゆゆ
車をひゝゝれゝ入ゝゝゝて惟光ゝ
ゞゝ妻戸をゝゝてゝゆゞゝゝゝ
ゆゆ氏君とゝゝゝゆゝゆゝゝゝ
ゝゝゆゝゝゝゝゝゝとゝ 釈 ゆゆ氏君
のゞゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
湖 いゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝとゆゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
釈 父ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
玉 いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

抑 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いふさてよるハ[illegible]まぐて迎者の
ふうふまでとあむを云のおふまハ
生いるよといつりんぼ坊ぐべ―
さいりいさく
釈あやゝ―ぼふぐぢものうち
とけ―ちゞ傍いちぼさく
かるお者方とバえ〜 玉まぐく
夜半もられバ坊の内おゞ―も坊
とふハ坊のうく方今茶あを
ぶりの会にをにうりおをくんだと
いひてとちあふぬ坊ハとうある
おどうもおゑ―
やとも 釈やハ坊ぢくを―こ内の
女房ども坊ぢうきあゞうさすがふ
やとうちうくぬこ
ぢ―ぢくらひ 釈原氏物語
の愛をうきつくらひあふさ
うめのち使おて 釈人名のうさ
ひとをゝんとふうを中まひ
ゝふふめのちつひとひひあまよ
ありちうのあうをを思のやまひ
てうあうそハあゞ―ばとあきれあを
まうも同ぢくぐ 玉ゑを同―
ことぢうるまあ―とく

いでさせ給へるとおのゝてうとやひていふ。
（原注）うゑへ日ゝ
（点本ニナシ）ひとゝとやゝ
（お地ゝ注）おわぐとゝ言。
（答）いゝへやゝ
みゝてわゝ。君いり給へバいとうゝちゝ
（注）うちとゝて。あゆゝたふぐへどもれ待ゝふ。と
（原注）やゝ
（原注）まぐおゝい給ちぐおいでおめさ
おゝ中ゝんゝかゝる御ぐわをちゝでゝいぬる
かのゝゝとて入るへぐ。やとゝんえちゆゝぐ。君ハ
なふぐゝもあく祈給へゝるをいぐゝたおどうゝし

さいふせうぐゝんなぐハ
釈大まへハ惟光と後行小女房の
名ゝとゝとゝまゝてゝるハとゝ惟光
もかゝまでよ生まふまゝく云ひ
ようゝうるあゝめバ坊ゝくべさふり
義心惟光ゝこの不まで為ゝうゝる
ぐゝぐちぐゝいとれゝもぐゝいぐ
ゝ文ぐとあまぐバそれも祇あ―
ゝうゝくとゝうゝ
釈心地ゝ[illegible]
ゝて八ゝふぐゝも学ふハえ
あゝぬふまゝて文人日ゝうあハ
ゆゝくゝ―とゝふさて
ゝふのゝとゝ―せゝうゝんよハ
釈父ゝの坊ゝうゝぐ仏ゝとゝれ
ぐさゝゝとゝゆゝ―とゝふさて
ゝる文ぐさふ坊ゝゝまゝさバ
釈お坊おゝゝもさバ坊ゝて
自然ゝいりゆゝゝとゝあゝ仏ゝん
とゝふゝ
ゝひゆゝふさ坊ゝのゝふ
玉あゝゝう係ゝて仏の用ゝ思
業ゝもあゝさゝゝあれバとゝふゝ
さゝゝ―ふゝく 釈世ゝ上の女房ゝ

（原注）髪ボ
（ネトボケ）
（原注）
（サルアオイデ）
（原注）
（使）
（宮三十八）
（呆）
（原注）
（ワタ）
（ニガシ）
（紫上）
（抱）
（イチゴ）
（原注）
（コレミツ）
（此所ハ）
（宮三十八）
（宮）
（迎）
（テラヘ）
（イヨ）

まゐ給ふよう。とのたまへば。かんあるて
サワギテ
しく。そふていとびんなくたん侍るべし。
フツカフニ
うめのわ〳〵をきのうんよりぱらぱらとゆ
マウ
やむ。おのづからなどくさるべしよりて
アケウ　然　間　怪　宿縁
しまさぬ。どもらうも侍りなんをいて
ガケナイ
そひやわるにおどのことに侍きべさぶふ
イクラキ　侍
人〳〵くるうう侍るべし。とふあれば。侍内
メイワクニ　マヽヨ
のちふも人たよりなんう。とて侍車
イクナシ
アトカラデモ
よをさせたへば。ゆかぶんなどまういうはすよう。と
ヒヨンナコト　（と玉ハ）
思ひあつりうとうぎみも。あやしとおもく
イク　紫
しておいのふけ納てとぶめやえんうをを
泣

やをらやをやて〳〵穴隣躇もて
ちんおゆてうがさあるうがごとし
そふかおなうう　釈　巻まるあるく
とと公なのこちし〳〵ゆくをとと
いうよこうえてとれいうぐうえと
のくまんうえ法おふるまうせをと
やうふあるハうぐうそのとハ
次よんてさまこバを
ゆ〳〵ぐ〳〵ハえく　釈　ゆ納え
の車ようゆうゆうるをとまひ
てはのはをばかくうしあうう
さればそうハえんとあるば
ゆをよゆてせんとのまを
おろふ仰をて一つのるぎと
してうるゆ
ゆうあて　釈　お納をもろ
とやうぐせんうるて車ようる
ゆをうにあさまう
釈　仰ゆ思さゆてむあさをた
もるうう餓ようるぐ
とてもうくてもえく
ぶ　うあさをえひあさをゆひ
つひゆみあうぐとゆうのうをを
歌きうる女のを画るぐとし

まゆ給よ。前夜　（紫）
こづ〳〵も。ようう侍ぬきうてのゆぬ。
二條院ハちうをまぐぐゆあうぬ
ほどにおちうくゆのふれうるま
よせておりのふゆうをばいとうふ。
おれいぶきておろ侍ふゆ納て
美のうもしゆ侍るべきう
ようゆてやをうんだをえあるをを
ばううハゆうまうゆうまぐゆう。
あうばおうう。送
なうて打ゆ。ゆちうにあさをうゆ
ナクテ（車ヨ）　サワキヤノニ　キヨウサノウ

〜このり〜に人〜ハ尼君母上ゞ
いらゞさハ不仕合とゆさてゆゆ
さすゞに西〜〜〜れハ
湖 今〜まの姫〜とゞ〜いまく〜
きこと姫ゞ〜〜るく 評 此〜ゞ〜
めゞ〜ゞ〜侍の〜ゆを〜ゞ〜ゞ〜
ゆ〜る〜ゞ〜ゆ〜
こゞ〜〜ハすゞ〜ゆ〜ぬ〜い 湖 源氏
ハ東の對ゞ住ゞ〜ゞ〜ハ西の對ゞ
注丁ハ屏風ゞ
釈 ハ帳ハ屏風ゞ〜ゞ〜ゞ
ま〜〜達〜〜〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜
ら〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ
御〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ
注木丁のゞ〜ゞ〜
玉 ハ木丁ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ
ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ
ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ
ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ
注丁ハ屏風ゞ
釈 東の對ゞ
ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ
ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ
ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ
ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ
釈 今ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ

もゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ
いゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ
てゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ〜ゞ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

やうれるぞ。うちをんなどもをきゐひて。（イキハナレ）
伊勢物語
いかむあくうちをんなどてみ給へるぶを
うたてきよられもおちまきて見給
ふひんがーの歌いよわるうのつるぶもち
東
いでーぞ。庭れこぞち池のるるどのぞき
木立方
まつだ。おぐきれ我をよりけるやうぶ
おりーるてんもちめ伊勢物語
きもぜよ。ぞるおういでいりつぞぶを
イはず　ナルホド　オ
うーるぞ。ぞ所るとおぐ伊勢屏風ぞもぞ。
モシロキ
いとをうき絵をみつなぐきんて、
心字
おるるもちるのーや。君たち二三百円
源氏　禁中

詩の句がはるへ出のふをちゐ
せ字のえいでうつく
四位の位にはまぜる
河　古今の月夜を柳陽をうき
まぜて物でうのりはるるる
月もるふるすぐれるのをーふ
えうをれりるこれまぜうく
●世ちと尾花の方をそはんちう
ちりぬ四位の位どもひまるく出
入るるをめづしとんるるるこれ
まぜるとと四位の位の赤袍のちちまーるるをうの柳
ざるーをこれまぜてとい月影ぞう
これはうれとるるをーく出て
ゆもるふ力のるる河を長波の
ぞひをとをるるーく　新　こるは
三位も三位も七位もいるーぞ入
べるるるるてるるるで出ては文の拾
きるを暑ーて四位の位るるーく
ぞーりのこれまぜとひるるを
てるるべー
安入て　●訳　出ちふりーくは河
るるのぞるを入ばとあるばすーの
位びあーるりれぞあり

屏風どもちどころ
●訳　上を屏風のるを面ぞ
いるるはを部文まつるをーるる画
までをいるるるるりと行しる
河伝のあぞーー
もぞてかるりと　●訳　すぐるぞを
かるりるとるるぞ
むーーりとるぞ
河　ちるねどもむーるとるぞ
るるれぬるりやるるれるるるる
のるる　源　六位をるる　細　花草の
れゆるるるる
要るるるのいとるるるる
●訳　出れれるりのるるるるるる
まぞ要るるるるるるるるるる
べるれはるるるるべー
するるるるるて　瀬　るるのるるる
位はるるるるるるるるるる　花草の花を
屏るるるるるるる葉まるるる
射るるるるるるるるるるる
けるれるるるるるるを人の位ん
るるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるる
屏　るるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるる
○差ゆーるる

へるるるるるるるるるるる
らひるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるる
きるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるる
集
ぬるるるるるるるるるる
紙
るるるるるるるるるるる
別
るるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるる
位
位るるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるる

寝ハ只ひとあるれをこそ人あひ
げくに成つゝのゆあうゝれどと
まるらるゝハ生げられんまハ出
草おり
よろ〳〵後ど 国 ろくこもろ
いぬよりいとゝ
うちをぞゝて 釈 さぢ〳〵ひて側
向ありてゝれまゝ
ゝあぐ〳〵あゝと 釈 源氏ハ
ゝれゝぐゝるゝくゝまでゝはゝよゝこゝろ
うゝるゝハあゝくゝ
おゝゝれゝ
ゝくゝべゝさゝゝ 花 ゝくゝべゝさゝれ
ゝゝれゝゝゝ

よ。なもいとうひあうはげりて。故こあまぎんも。
かうそ宮（紫ノ）ありもんまをいとこのしと
おげりそ。しるあまぎ。ぬのとれいとさう（イカガシイ）デ
すぐ（スギ）たるんぎせの。ぬのまつ。ぬいうう。（ジヤウニ）
わあさんをびんなどいそでんよまう（フワガフナ）（己カ）
きくぬてちぶ（奉）ぶ（放流）ぶるあやんうとあく（ノトミエル）
かるうぬひぬ。きて出ぎ。ばつげよと（告）
のあもうぶ。ぶ。く（コムヅカシ）。伝教の法のとをも
ぶぶ。ぬ。どあとられて。あてし（可惜）
うしぬ。ぶ。ぶ。ぶ

いとをう
おとうみをとられば　湖　源氏おとうと
くすりのくすし
さるうこまハ　釈　ちるうさくハも
てあそびのうつるふ方やとるき
あり此次よりハさるうふらうう
きようをあしく述うえ
さうらんあうえう
湖　師　さうらんハ嫉妬おぢのう
をいふくるとぢちとハ男のむを
いふくもうみぢちハ女をいふ
あう　釈　年ごひてまこと
夫婦とあんふりさうらん
あうてもうきすぢふねさう
あどせばおんふもさうあもも出
来やとんとんもかうべしさう
バ女ぢも帰ぢちよあわく
業ふのもの自然といでこん
を今ハまぢさるもあるまぢ
をうき教びおくといつさあう
ぢ
むすめおどちう　釈　まこの娘
おどハうどの年ごろふあるどバ
かくんやとくあるまひて情六

今ハ里まぢこの海氏やをいみぢうむ
びよ纏ちうやをおとうをすれバ先ぢ
出むう向ひくぢおいまよおううひはあとう懐
よいわおくいさうう入居チツトモ疎くさづうとも
おひううぢ帰ううよハいみぢうう
うたうぢちるわうぢさうらんあうなふ
くまとむつうきすぢうよおうぬまバ日ぢ添
んちもそうあうふぬうもいでくやと出来
うう後おうれん紫もううみぢちようひのあう
キガオカレ
れ来もおのづういでうう我いとをうれ
イモヒカレ自然ト
ものうあどちうぢうう
モノヌガ只今ハ
息女コレホドモ

ゆうともふふあどへぢてうき
きまくふえをきぢたまこまを
つひよ夫婦とあどきん人あれバ
さまううううづき程くあ
ぢをよう
これハいとさぬうをうさるあく
国　こまこハまこのむすめとうさ
まううううづきぢをとう
後よのをうれ夫婦のうこひ
のやうもあどうくとあぬの
来へもうけいへうはうか
づきぢさくハのうむすめうたくつあ羽し夫婦のうれさるうううさるとハいとをうれめてあそびぢとすで
ホ上ふいひくうこへハかうれ来ま　釈　この孫後ちこのまをさもくふ仲をうくはぢをうちゆうびそのう
を源氏君の世をとうつくふをけくなりううくれいひくううあくとぢをうれうう次のまはふそのまホ二重
流ふかをうれバむうさんのうたいもうつうれうされ
とくまこのかをう反対ううる孫をひさすべく結びうるあう

イあまこで
よたうぬまきぢぱんやをくうちぬまひ。
隅心
ぢてあるうきさすにおきのうちどハ
もすまぢれをうまをていとさ海かをう
為　イうはん　様変
うるかうづきぢはなうとおいいるをう。
モテアツカヒ種　紫上